

知性

873

解題



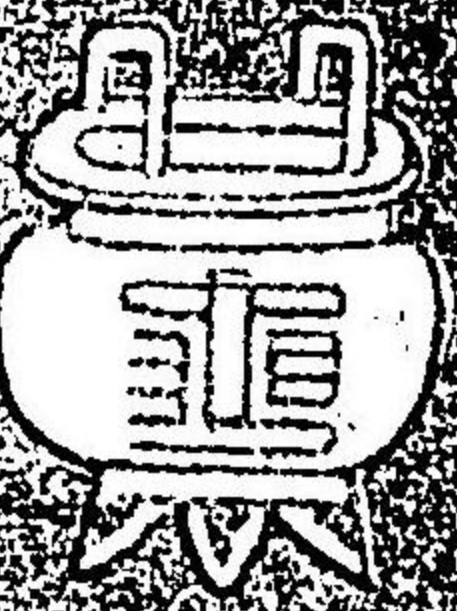
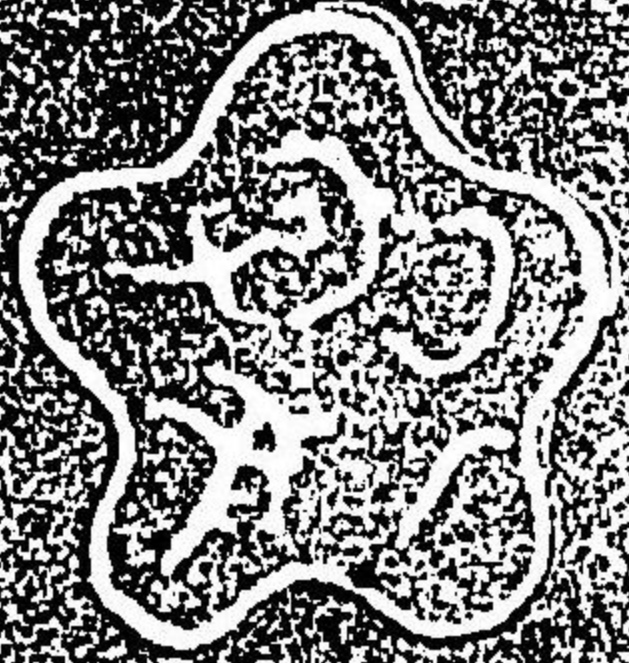
温古小説

高砂大島臺

全

其蹟
自笑

著



高砂大島臺

其蹟

国立国会
29.7.22
東京府

33333

湯春の徳成候人々南枝花
始て用く秘清鉄将珠の江も
志ありしまき嫁は伊の谷合
乃梅白くおろそりしめて
熱く麻子しつて水く用
生乃清生夫婦結白髪
の尉と

高砂大鳴臺

目録

第一

山川万里を隔れ共諸分替らぬ廓の仕掛

前代にない今を始の室の惣買花前といへる名木は十八公の粧ひふらくの男伊達廓に是を持あす

第二

上根よよつて腰を押男伊達の大將

大將の奔是はうるさき世の然唐土の古語を引は兄を崇る輪々観の勘當に預るほどの悪性者

第三

異國よも本朝よも又なき寶物君を知らず

樹木の陰より顯しは皆悪者の姿ならずや女郎の澁む色男前を馴たる大よ臣未代のためしにも又なら肥後の賢人

第四

我見ても久しく成ぬ街道での追刺

樹志れしそ後瑞の好り子集れ
歌をそ殺ふねの名をそる毎の
大鳴臺後後乃楓とい物なき
あそるそりの初すそるめけ
むくくくくくくくくくくく
作者其蹟
作者自笑
高砂大鳴臺

婿のれそは後編の好る子孫れ
 歌を終ふねの名もさる所の
 大の巻を終へ候し物事
 ありふるなりくの好るそる
 も

作者其蹟
 作者自笑

高砂大鳴臺

明治廿五年十月十日校正

目録

第一 山川万里を隔れ共諸分替らぬ廓の仕掛

前代にない今を始の室の惣買花前といへる名木は十八公の粧ひふらぐの男伊達廓に是を持あます。

第二 上根よよつて腰を押男伊達の大將

大將の齋息はうるる世の唐土の古語を引は兄を崇る諭人親父の勘當に預るはやの悪性者。

第三 異國よも本朝よも又なき賢物君と知すや

樹木の陰より顯しは皆悪者の姿ならずや女郎の概む色男迎ひ馴たる大よ臣末代のためしにも又なき肥後の賢人。

第四 我見ても久しく成ぬ街道その追剝

中にも此大夫は心中を立る赤前垂ふしきやみれば盜賊のどふして知た懐
の金盜賊の上をもくこなたの御名を名乗給へや、

第五 住吉屋に先行てあれよてまぢ申さん必や

悪性がつもりくして素紙子大臣女郎が手紙にする友成とは我事也猶いつ
までもいとしかる兄弟の契情

第六 一聲のなげぶしも實名を得たる松の果

年久しくも見馴た濱邊にない圖な座敷馴染の大夫を館に入あぐいはれり
なきか殿のあどづれを待にやるせなは姫の心

第七 今ころ不審春の日の光渡る小判盗人

今は何をか包へる内より謀報の企宵よりあつさかけて計略の密談
春の林の東風に寒さふな素浪人

第八 生どいける物毎に夫を慕ふの嫁の習

後悔の頭をまくかさぬらん跡末の事詔を聞ば今迄の悪性は方便の色狂ひ
誰もかも知人にせん新規に抱た兵法の達人

第九 青疊敷なふべたる並間より顯出ー兄さが姿

望かなふて兄上の姿を拜むうれしさよ弟御にどうよくな腹を切どはうた
ての仰い也一間の中より追劍の昔顯す兄の似せ者

第十 さを腕よの鐵砲かまへ納る手にの寶をーてやる

抱し家來が隙をくれどいふといか成事やらん實や仰さても事も思や御家
の而箱賢よとて鳴して置て問ねとすたくみ

第十一 眞ある女郎屋を琢く種となる欠落

親殿の悔み座敷籠に入迄命ならへて此年迄相生の夫婦と成て今去狀と
は兄が太夫を請出した謂を委く語給へ

第十二 先案じても御覽せよ主を畜生にしてよい物か

逃て出た太夫が行衛いぎ白雲のいるくくと女房が分別はふかみどり立寄
影の御水公若殿の爲に計略とは君はしらすや密の談合

第十三

實様々の舞姫の姿を見知大將の眼力
増てや生有人として母へ孝行せざらんや大敵つゞこの拍子を捕へて入込
大神樂さしも思ひし計策を見付られても騒勇士

第十四

能々聞は難有や真は母より孝行なり
眞なり松の葉の塵程も家を望ぬ兄が心庭梅花を折て頭にぞす母の白髪は
二月の雪互に迫ふ心づかひの親子の遠く遠からず

第十五

婚禮の壽相生の松風颯々の聲を樂む
草木の心なしと申せ共親殿の御師を松の色參詣を出く堂供養の法事の鐘
の音す也兄弟の連なる枝を鳴さぬ時津風千秋万歳樂

目錄終

●高砂大嶋臺

第一 山川万里を隔れ共諸分替むぬ廓の仕掛

今を始の旅衣日もゆく末ぞ久しき抑是は九州肥後國阿蘇宮の神主友成とい我事也我いま
だ定まる妻もなきによつて心になふ女もあらばたとへ卑賤の娘たりともよび入下屋敷に
さし置き酒の相手にしてなぐさまんと下の關上の關長崎の丸山筑前の柳町博多小女郎に至
るまで名ふ聞へたる色所へ遊行し十日廿日あそびるに西國をだちの婉共おまねくふつ
つかに足ひらたく腰ふとく肌白からず筋目あらく心に如在もなく情にうとく欲をまら束
物にねそれず言葉に訛わつて角だち物とし花車ならず心底まこと有ながら曾て色道のな
ぐさみあへ成がたしどかく鯛の丹後女之盛の花の都に増たる事はあらじと此たび思ひ立都
の女郎を一目見せばやと存し又よきついでなれば播州室の遊女町へも立寄一さひさして都へ
のぼらばやと存し旅衣未とるくの都路をけふ思ひたつ浦の浪まづかに海上にもしるく召
つれられし相口の家來共と酒事して角のとれたる色男丸にやの字の帆をわけて西風に懸を
ふくませ浪路としりて播磨瀧室の色姿にさつとさける爰に一夜をかたる情とて見だるく
柳風呂に入て此所のまやれ女花前といへるは風俗戀のやつてにして東の勝山か仕出しにか

高砂大嶋臺

はる所なし女はさもなくして客の思ひつく事内證によい所あればこそなれ是にあひそめしよ
 り日和の出船にのらま口舌にいかりおれろして室津のつゞけ買とて女郎あるはさ仕切て日
 ごとになくさみかへてあそべは俄に愛のはんじやうよいもあししなめに揚げれば諸
 旅人だびのうきはらしに室の遊女を心めてにして國々を出しより前巾着にこまがねを入れて
 此湊ふわざと舟よせけるお思ひもよらぬ想買前代聞も及ばぬ大さはさ皆く思はくちがひ
 せみに叶はず下帯まめてかんにんする夕ぐれの恨と曙の出船にをのれが金銀でまをる事
 ながらあま成者これぞくはぬ殺生とつぶやき今は兵庫にも日けの女なければ大坂迄れよ
 ぎつくやうに浪路を急げるもとより金銀お事かぬ友成其身神職といひながら大名に恥
 ぢらぬ万石取家につたへて神代に猿田彦の能といふ事を舞始られ高砂といふ婚姻祝儀相生
 の夫婦の顔をうつせし尉と焼の面則猿田彦の神作にて日本お二ツなき寶物入内祝の能
 に此面をかけて高砂の能つとめらる事阿蘇の家代役目にて此面とて家督相續繼目
 の参内をとつたられ阿蘇の城主と諸人崇敬する身なれば何にくらからぬ大島の一子近き
 比より酒色にふけり世の人口をこゝかり給ねば父左京の大輔友方伊見あれ共會いて用
 られず此度も遊山ばかりの上京にて此室津へ立寄花前が色になづも高なしの大さいぎ見ろ

人耳目をたどるかせりいづくも色所へどめきに來る者共はあたまがちに浮氣を第一と肩臂
 をはりまがた此所の男だて茶箭組といへる立るといふ心にて付たる名成へし中間のれや
 ぢと立たる頭分の男だていづくんねり門兵衛とて世界にこわいものとは格氣づよい女房
 ど日錢かしより外にこなく書寫山の天狗が通力自慢の鼻のささをへしゆがめ落かする神鳴
 を生捕早船につけてかふるほぎの氣象もの類を以てあつまる無分別ものには蛇腹剛介業頭
 十藏冥途の九八月見三五郎などいふあたまに血のねり強敵共日くれかたよりつれたちて
 室津の里の夜見世に肩くをどめき少もきつく男あれば引とらへて溝へぶみこみとかく
 喧嘩を慰にすることふてきなれ法外成奴原とは思へ共身を持ほどの者は所あしければ胸
 をさすつて忍の一字を心にめすすのいて通せば我々の威勢にたそると思ひ猶う力身つ
 のり所のをばぎに成て廊中もてあまし大門口お人を置て入まどとすれどさやつらが中間
 れよそ二百人にあまりぬれば手出し成がたく後には理ひひて局女郎三人に五升樽添て毎
 夜かれらお中間へ出し作り罷の塵を取もゆきげんようおばれてもらはぬやうにたぎなひけ
 り他國の人ばかり悪者の徘徊する事しらす旅裝束のま、柄袋めたる大小立つけは
 さて中間一人めしつれおびやくの門口をのぞきまはりらうそくのうごりにぬぎかけの紅

鹿子。一しは色ふかく見へて、かゝる艶なるすがたに目をうばこれ蛇腹團介が足をふみまを事
 かな笛と思ふもの共、いひにじて、かかぬといふを彼旅ごう。色と詫れといひかなく
 聞入す。六尺ゆたかな男共、七八人も取まきぶてのたけのどすでににぎりこぶこぶより上れ
 は、武士のつらとくはされては一分たすせむもなら仕合と覺悟をいめて刀を引ぬき前にす
 いみし取出の男だてがひたいをちやつれば、やれ切たのどをきたち、大脇指を茅の穂をぬき
 しことく抜揃て打てかれば、件の侍あしもどあまければ、柳風呂といふあびやの内へかけ
 入、大勢を引うけて、しばし戦ける條に、廊中より男共、手にく棒を持出、戦ふ中へわけ入て思
 ふやうにさせされ頭分のくはんれ、門兵衛すゝと出。若い者共先まで相手の侍を此あびやあ
 預け置て、人立もしつまりてからびそかに出入も成事ぞ。所もさばげば夜見世のさとり。汝らが
 ひげに成やうにはせまいぞと、まが頭とて、おどなく制しければ、組下の男だて共、大將分の
 下知にしたがひ、皆く刃物をさやにれさせ、表へ出ければ、人立も散て早速やかましさをまづ
 まりぬあるじ柳風呂の空兵衛旅の侍を、盛所へまねき入、余國のほう方ゆへ、櫛子存なくして、や
 つらとの口論、無念に、思召ふが所のわるもの大勢の中間われれば、及物ざんまいにてはだち
 まち、伊命もあやうし私取持、やつらとをなだめ、無事にして御かへま、やべし御ふしやうながら

柳代として、金貳百疋出され、頭分の君に手をつかねられて、あやまつた堪忍してくれよと御首
 葉をたろされ、すれ、うつくまう拙者がすましますと、旅人の侍を笑止に思ひて亭主わけを
 いひ聞すれば、侍あるじの言葉も聞て、誠に初對面なるに、念頃成心さし、近頃以て過分の至り某
 は九州肥後の侍、今宵此里へ来る事、全く自分の懸にあらす。伊主人の若殿都へ上りあるよ
 しにて、御館を出させられ、常室に御滞留有て、過美の御遊山奢の沙汰に、御國本へ聞へ、執殿以の
 外の御服立にて、若旦那の御たえみならぬ御内證のいこくを申せ、奉り、片時も早く御歸館有
 やうに、御國の様子を御知らせ申さんため、ひそかに早舟に乗て、當津へつくやいなや、若殿の御
 懸なされてござる揚屋を尋たために來り、思ひもよらぬあはれものに出相、此仕合無事に濟
 事ならば、金銀といかにも出し申さんが、儲侍の町人のあふれ者に手をつかね、危する段は、た
 しにくし、何とぞ身共が出ずに、櫛着代にて、穩便にすむやうあたのそとあれば、亭主はつと俄
 にあたまを懸へつけ、扱の肥後の國阿蘇の伊城主友成様の、家臣にて渡らせ給ふか、則若殿友
 成公、こなたに伊入あそばし、拙者夫婦へ、伊目下され、此間段々過分の伊褒美をいたゞき、有がた
 さ仕合、伊國もとぶ首尾に成て、我々とても跡々までの先いわく、あはれ者共が所のはしかり
 ながら、私か命にかけて、櫛明御手をつかねさせは仕るまじ、先御座敷へ御案内申上んこなたへ、

御入有べしといへば。これはくさぬわひの家へかけこみ。思ひもよらず若旦那意得るこそうれしけれと。亭主を先に立て友成のめたま座敷へこそは出にけり。

第二 上根によつて腰と押男伊達の大將

驕の山高く。費の海ふか。浮氣の風にまたかへる。柳風呂の座敷の。小判の光り。山吹の瀬を爰ふ。うつ。高下に限らず。目鼻のある女郎。残らず座につらなり。大臣の御さげんを取けるや。友成公うつ。ごとく。げふのいかにいふ事をしらぬほどに。たましむうかれたもふ所へ。あるじ。件の侍を伴ひ。座敷へ出れば。友成肝をつぶされ。朝熊左衛門正春ならずや。何として此所へ。来けるぞと。ふしんあれば。正春承り。何とまで参りしとは。うつ。なき。詞君。此所に。滞留有て。希有の奢をさへ。えられ。室津の遊女惣買といふ事となさる。段親殿の。耳に入。禁裏への。聞へ。隣國の沙汰。旁以て家の破滅。早。室津へ。罷越。不届の段。といひ聞せ。すぐ。追拂ひ。来るべし。と。是迄の。不行跡の段。ケ。條書になされ。御勘當の。墨付。相家。老雲川。大膳。か。悴。源藏。と。某。兩。人へ。仰付られ。今晚。當津に。着船。明朝。早々。私。源藏。ケ。條書を以て。此家へ。伺公。仕り。直に。追たて。ず。管にて。いゆへ。源藏。族。くた。び。に。て。休。む。中。内に。ひ。そ。か。に。旅。宿。を。ぬ。けて。是。迄。参。り。し。は。此。内。意。中。上。明。朝。兩。使。参。ら。ぬ。さ。に。一。ま。づ。肥。前。の。伯。父。と。松。浦。の。何。某。様。方。へ。立。退。あ。そ。ば。され。か。さ。ね。て。大。殿。御。さ。げ。ん。の。折。を。見。合。私。内。意。を。中。上。な。ハ。早。速。伯。父。と。を。た。た。の。み。有。て。御。勘。當。の。ゆ。わ。び。な。され。ふ。た。し。び。御。館。有。や。う。ふ。と。存。け。内。證。を。ゆ。え。ら。せ。に。参。り。たり。今。中。て。役。に。立。さ。る。事。な。が。ら。か。や。う。に。罷。成。申。さ。ぬ。や。う。に。と。憚。な。から。御。國。も。と。に。て。も。折。に。ふ。れ。事。に。よ。せ。て。御。異。見。申。上。し。と。御。も。ち。の。な。く。か。や。う。の。首。尾。に。成。ひ。事。か。へ。す。く。も。懸。念。な。り。深。更。に。及。ぬ。内。早。く。此。所。を。御。ひ。ら。き。然。る。べ。し。と。涙。を。う。か。め。申。け。れば。何。父。友。方。公。に。は。御。勘。當。と。や。誠。に。年。來。の。我。念。願。成。就。せ。り。慈。父。御。憐。愍。つ。よ。く。是。ま。で。と。よ。ふ。も。く。御。堪。忍。あり。し。事。か。な。御。勘。當。を。ね。が。ふ。身。な。れ。ば。かね。て。より。覺。悟。の。前。更。に。お。さ。ろ。く。事。に。あ。ら。す。と。め。し。つ。れ。ら。れ。し。御。供。の。人。々。に。も。す。ぐ。に。此。旨。を。仰。聞。され。御。用。意。金。を。御。挾。箱。と。出。され。それ。く。に。く。だ。され。汝。ら。は。明。日。是。より。國。元。へ。歸。る。べ。し。名。残。れ。し。きは。花。前。なり。此。や。の。情。の。段。に。す。れ。い。せ。ぬ。ぞ。命。だ。に。あ。ら。ば。又。か。さ。ね。て。あ。ふ。べ。き。ぞ。と。伊。い。と。ま。ご。ひ。あ。れば。花。前。は。夢。見。し。心。地。に。て。友。成。お。取。付。て。い。か。成。深。山。又。は。は。な。れ。鳴。へ。成。共。付。参。らせ。伊。と。や。づ。か。へ。中。た。し。と。涙。を。な。が。し。や。け。り。正。春。友。成。の。御。勘。當。と。聞。召。て。日。頃。の。願。ひ。成就。との。伊。一。言。い。か。に。し。て。も。心。得。が。た。く。伊。酒。さ。げ。ん。に。て。仰。られ。い。や。子。と。して。親。の。勘。當。を。ね。が。ふ。どの。御。言。葉。禮。義。に。そ。む。き。も。つ。た。い。な。き。御。仰。色。酒。に。御。心。亂。れ。か。し。る。人。望。に。そ。む。く。御。藏。言。を。仰。られ。い。や。と。色。を。か。へ。て。申。け。れば。何。某。か。勘。當。と。聞。て。年。來。の。念。願。成就。せ。し。と。い。ひ。し。と。酒。興。

成就との伊一言いかにしても心得がた。伊酒さげんにて仰られい。や。子として親の勘當をねがふどの御言葉禮義にそむきもつたいなき御仰色酒に御心亂れか。しる人望にそむく御藏言を仰られい。やと。色をかへて申ければ。何某か勘當と聞て。年來の念願成就せしといひし。と。酒興。

の嚴言どおぢける。自余の者はさも有べし。汝ばかりは勘當を悦ぶ我。心の内を察しやつて。かつこれ仁義の友成と感してくれん其方。色酒に見だれたるかどの一言はさよくがなし。今改めていふ事にわらね共。汝もともに某を奉行跡者と見るが心外なるゆへ。心底を打明ていふてさかす。此物語する中。座中の男女まばらく次へ立べしと。皆々勝手へ人を拂ひ。正春が側へ居より。柳阿蘇中興の大將友高と申は。身が爲には祖父家督繼るべき男子なく。柏手姫と申息女只一かたならではあらざるゆへ。祖父友高公。從弟孫に式部郷家方といへる人。御國の端に五百石の合力にて指置れまを。一家なればとて家方を友方と改め。人縁にむかへ。柏手姫と夫婦おなま給ふ家督殘らず息女柏手姫にゆづりて果給ふ。友方繼の參内として都にのほられ。在京の中。賤さもの娘を旅館の伽と召置れしゆ便をくはへられし所に。程なく懐胎して月かさなり。究竟の男子をさうけ。友次郎と名付られ。御寵愛かぎりなく。御歸國の節國へもつれてくだりたふ思召けれども。元來友方は小身なる人。一門たるによつてむこに取て。家國をつがることいへ共。おづりは皆柏手姫受得給ふ。女房の影によつて大身となられし友方。國の本妻の聞へを遠慮有て。かきねて見たいに咄末にて友次郎を國へよびとらん。都に残し歸らせ給ひて。後其翌年本妻柏手姫懐胎なま程なく我を産給ふ。一家諸家中。國迄やれ惣領子こそ御誕生わしめて

たしくと祝舞山のごとく。万歳をとなへま。都に残し置給ふ友次郎殿。事は仰出さる事叶はざる首尾に成て。京に其儘さし置れぬ。則此友次郎殿は。げんさい我爲には兄上に紛れなし。母柏手姫は産後の重病によつて過行給ふ。我成人して兄ある事をしらすものありしゆへに。父友方。是非兄友次郎殿を國へむかへ入させ給へと。れすしめ申せ共。高きも賤さも入むは世にましならぬものはなし。都にては寵愛ふかさ女の腹より出生の男子。我にまさりてさぞ友次郎殿をふ便に思召れ。此家督をゆづり惣領に立たふ思ふて。れはしまさんなれ共。母柏手姫死期に。家督殘らず我にゆづりわたへ給へば。父ながら思ふに。甲斐なく年月を過給はんと。父の心底を察しやり。度々れすしめ申せ共。汝母より家督を受し上は。外につぐべき者となしと。曾いで御承引なき様子。所詮我れ此家に有ゆへ。つがせたく思召兄上に。跡を得ゆづり給はぬと。覺れば。どかく我身持をわしくま。世の人口にも預るほどに。ならは。勘當あらん。の必定まかる時は。兄上をむかへられ。跡目になてられても。父の難といはず。皆我悪さゆへに。あたり。跡めをつかざる事よと。某斗を馬鹿者に。いひたて。親にも兄にも私ありとは。よもいじじ。是迄西國筋の色所といふほどの悪所へ。かよひ。標も濫行なる行跡をなせ共。母よりゆづりを受たる金銀をついやす事。我何と制せんとすいふ。んわるさをつくせ共。更に異見もまたまはず。あまつさへ去冬

より都離形中納言殿の息女を懸望して。我と妻合せ家督を渡し隠居有べき御支度の所み當春表の惣門に一尺の布尙縫べし。一斗の粟尙舂べし。兄弟相容ず。それ大小は武家の道具。大を捨て小を用るは脇差一本の町人に成所存かど阿蘇こや愛での評判も落書を一紙に書付張置し事。れよを近隣にかくれなし。此ころを考見るに昔漢の文帝后倭臣等の言葉にまさはされ。兄上を配流せられ。庶子に代をゆづらんとま給ふ時。國民こそつて一尺の布なをぬふべしとゆひて。わざけりたる語也。并に大小の刀脇指大は兄小は弟大を捨て小を用るとは。兄を捨て弟の脇指を用るは。町人にふとつたる仕わざと。蔑せし落書。兄有ながら我跡目を繼によつて。父上の愛にたぼれて邪なるなされかた。父上に悪名を付る事。身にたいて不孝の第一。世間の人にくしるゆびを指る。恥しさに。ずいぶん不行跡に身を持たし。御勘氣を願ふは。國を拂はれ。兄上に家督をつがせ奉らん。孝子の心さしなり。今宵是より心にまかせ。何方へも立退わいた。汝じと歸て此旨を父上へ申上。都に流浪してまします兄友次郎殿をむかへられ。家督をゆづらせ給ひ。永く阿蘇の家相續有やうに。面々も涯分忠義をばげむへし。命あらばかされてあふべきぞ。涙と共る心底打明てかたがる。孝心の程こそたぐひなき。

第三 異國にも本朝にも又なき寶物君は知すや

賊に性の善なり。悪黨者の頭分く。いんねり門兵衛。宵よりあびやの庭あかくれて。相手の旅の侍が。種子を伺ひるたもけるが。友成の今の物語を聞て。今の代にいためしなき。孝子つたへさく。普の獻公の次男重耳にもれたらぬ。義といひ。孝といひ。類なき友成公と。男伊達。の角を折庭の樹木の中にかくれて。感じひたりけり。正春。次弟を承て。尤一通りと至極いたし。しが。其義心には。たがひ。此度都一見の思召立にて。御館を知られ。い。伊家の重寶。高砂の尉姥の面を持て。御出ありし。全く兄と。御家督を進せられ。まじき御心入にて。寶藏より。ひそかに取出し。御持参あるに。紛なし。然ば御口と御心は相違。とも。此重寶の面なく。い。繼目の。參内叶。いねば。手をよく。家督を渡そ。とあるは。御身持あしき。と。よきに。せんと。の巧にて。の賢人。ふり。先此正春の信服仕らす。と。一圓のみ。こまされば。友成。大きに。たごろ。さ給ひ。何もなき。事阿蘇大明神の御討をか。う。ふり。廻行給ふ。亡母の地。さくへ。たとす。法も。われ。更く。さやうの。所存。な。う。ず。と。に。そ。ろ。し。き。誓。を。立。て。の。たま。へ。ば。正春。始。て。肝。を。つ。ぶ。し。只。今。の。御。誓。言。の。上。に。て。い。よ。も。い。つ。は。り。は。仰。ら。れ。ま。じ。と。扱。ひ。此。度。若。旦。那。の。御。上。京。を。幸。ひ。の。時。と。御。家。に。望。と。か。ける。倭。臣。御。寶。物。を。ぬ。す。み。か。る。も。若。殿。に。ぬ。り。つ。け。是。を。もと。だ。て。に。し。て。親。殿。へ。さ。ま。く。諷。言。し。て。御。勘。當。お。及。ぶ。程。に。こ。り。や。拵。手。有。て。此。謀。臣。め。に。拙。者。迄。が。眉。毛。を。よ。ま。れ。御。勘。氣。の。御。使。を。蒙。り。是。迄。來。た。る。か。エ。ま。な。し。た。り。是。を。以。て。今。存。合。す。

れば君その御正道成御天性を見きいぬ。惣門に落警を張御國退散の思召立をさせ奉らんばかりごと。是迄は都の兄公友次郎殿の所爲と存せしが。寶の盜主も路書の仕守も。こりや御家の内あする奴あるには極れり。然れば此仕手の逆心相知る爲なれば。明朝迄是に何心なき体にて御あそび御座有べし。私源蔵もろ共。表向より仕掛親殿御勘氣を申渡し申べし。其時御れさるさなされし体にて。此津を御身すがら退給ひひそかに夜に入私宅へ御入なさるべし。私方に隠置奉り。様子を伺ひひはし。決して逆臣相知申べし。只今寶の事をせんぞ仕出しひはし。逆臣速に取て他國へ去らん。さある時と御家の大事。何事も私次第に。はかりながら御身をまかざるべし。といひければ。家督を兄上にこそ渡さんと思へ。逆臣めが手に入させ。他人に家をうばくれんや。寶の出る迄。こどもかくも汝が指圖にまかすべしと有ければ。正春は悦び旅宿へひそかに歸りけり。友成は寶失しといふ事を聞給ひてより。心ならねども。當分色をさとられまじと。わざと是迄の調子にて。勝手へのけられしつさく。の御家來遊君共を又御座敷へめされ。改めて酒宴をはじめられける。半へ庭の樹木の蔭より。くはんねり門兵衛のつさく。と出かまへて。座中さはやま。殿も御さこぎなされまじ。我等事は此里の厄病の神同然に。廊中の男女の者に嫌はる。男伊達。くとえねらと申ふら。のあまりに御酒盛がけなり。され御めしもなき。推參の段。

御高免下さるべしと。女郎の座したる次へとしなれば。中小性花富作彌刀に手を掛素町人の座敷へ推參し。我ましとはたらくとはちがふべし。御遊興の妨。なるに罷給れ。歸らずにへたばりたらば。すねぼし切て切ふせんとねめつくるを。抑から友成公。此里の案内のため召つれられし大海風右門といふ太鼓持作彌を押とめ。あの衆と此廊へ毎夜來て。さばかり所の男伊達の遊人。且と御座敷の興にもなれば。そのまゝにとめなされ。御伽ふれかせられてくるしからぬ事。凡中間二百人余もこれあれば。ひよつと物いひになりては。第一旦那のれ名が出る。といろく。と云てをしまづめ。其夜このまわかしにして。朝日影障子。ふうつるを見て。こりや夜が明たは。獨臺のらうそくけせと。座中の火をけし。雨戸を明てのむ所へ。雲川源藏朝熊左衛門。上下にて供廻り引つれ。案内申て。兩使座敷へ通友成公に對面して。親殿御腹立によつて。御勘當の旨。が條書を讀立。是非なき御使者を蒙り。一段。武士の冥理にもつきしやうに存るも。兩使涙をうかめ申上れ。友成初て聞給ふ体にて。おとろさたる風情。父の伊直筆にて。不行跡の條書を拜見有て。何と申ひらくべき所もなし。身よりなせるつと。か。今更悔てかへら。此上と兩使の人々を頼み入。親殿の御さげんを見合。勘氣御赦免の取合せ頼む。扱。條書の中に。家の重寶高砂の面をぬすみ出たるよし。兩使へ急度相渡せとの御書付。そのま。まね。此而の事に。い。ては。曾以

て覺なし。此段幾重にも御食糧を奉る段申上て給れとわれ。源藏まゆをひそ免。然ば此面の備は、此度取てのけ館出と座なきな。切々合点の行ぬ事かな。コレ正春殿。此段貴公にも存の通り。寶藏をひらき。箱をわらためてなきに極つたるゆへ。自余の者の御寶藏へ入事ハ叶ねば。慥に若殿の御方に有べきとの御前にれて御せんき一決して。此度の第一の御とがめ。然るに更に御存なきと有ては。若殿の外に。何者ぞ御藏へ出入もの盗取しにや。旁以不審の至り。かりそめながら大切成事なれば。御口さきにてまらぬとばかり仰られゆへ。罷歸るとい立歸て我らども大股様へ申上がたし。まかど御存なきと申程成若殿の御印をいたゞき。段々友成公をせんき仕得ともゆめく。御存無之段分明にいゆへ。罷歸。此上の御屋形の御近習を急度御吟味下さるべしと申度ものなるが。貴公といかゞ思召るゝと。朝熊が方を見て申ければ。正春うなづき。御若年なれとも。さすが御家老職の御子息程有て。至極の御念。尤く憚ながら若殿へ申上。毛頭御存なきに極らせ給ひ。申上るも恐有共。曾以て御存なきとの神文を我々に下し給はり。いひ有難からんと云ければ。まらぬからの成程神文として渡さへしと。硯取寄。神文に血判して渡さるれば。重て源藏申機。然らば先大殿のけ機嫌のなをり。い迄は。近國へ御立忍ひなさるべし。御用の備も有。我々兩人が方へ必ず御遠慮なく仰越るべし。先當分御不自

由に有べしと。親大膳が心付。私へひそかに相渡いと。はさみ箱取寄。内々金子二百兩出し。友成公へ奉れば。誠に此節の志。一入祝着致せりと。件の金子を兩の袂へ入られ。彌々兩人此上乍願む。随分堅固にて奉公とつとめ。親殿の事をそちたちに頼む。晝夜心をそへて。御宮づかへ申呉られ。よと涙と共に座敷を立せ給へ。花前は御腰刀に手をかけ。自害せんとするを。一家の女郎共取付。むりに引放して。名殘はいつ迄もつさしなしと。花前を大勢女郎取卷て。親方のもとへむりに引立歸る。こぞびなけれ。兩使も涙ながら大門口迄見送り申。立歸てあじやの主を呼出し。若殿此度御逗留の内。御雜川の御はらひ金。請取すは書立て。只今出せ。残らす兩人つかはせしといへば。此間段々御近習の御方々下し給はり。一錢もどゞこほりは無。只あつたら御旦那を紙子あなす。が残念の至と涙ぐむ。こまほらしけれ。兩使は友成公の神文を取持て。九州へ立歸けり。いたのしや友成公は。伴の金を兩の袖み入られ。いづこ共定めなく。すこくと出行給ふ。ほんねら門兵衛は。夜前方今に見へがくれに。御そばをはなれず。一言もいわず。猶跡について。落つかせ給ふ所迄。かくれて御供仕る。こそ。さすがは立衆といわる。大將は。有てたのもしかりける。仕かたなり。

第四 我見ても久しく成ぬ街道への追刺

さのふの驛引かへてけふはときつけぬ話さうりの尻さへ切て此身ひとつのかくし所もなく。正春が方へひそかに來れどいひつれども家内の者共が手前面目なければ國へとはかへりがたしと被百兩を紅の一重纏絆につしみ内懐に入て思ひあたり過し比下の關の三輪屋の巴といへる女郎どたがひふ二世の契りを神く御やつかいかけて取かひしたる紀蹟こなたより女郎の方から大分我になづみ外のつとめをかきて友成ひとり一の心づかひ是まて相馴たる客ものきてさびしさまじに親かた様く異見すれをなをやめずむごうめたれともいかなく苦みせずいよく外の客にわとす我等行ぬ日の格子に泪にてくらぐつこも折檻の仕やうなん庭にたろして三ツがさねの美をつくしたる小袖共も引はぎ木綿のときあけものをさせてみそこし持せ豆腐のからを買につかはしけるみ是をも耻れもふ人ゆへなればと共年の霜月初て降來る雪にくさもつもりて丸裸になして大裏の柿の木にくくり付てかされて友成さの忍びてい見る事是でもやめぬかど賣ても更にあふまじきといひ日お死るをさはめ五七日も食事を断て或日涙をこぼすを妹女郎が見る目も情なしといひければ我身の成ゆくを思ひし涙にはわらず是はきに思ふとはよもや友成様いまろしめされまゝ縁か因果か是程にもいとしう思ふものかはと身もこらへて片息に成時且那寺の和尚常徳に参ら

れ此跡を見て親方へ段々わびせられ口のあるをさらいわらに難波の色里おしやとらへるくつ口のもとへ百兩に賣てやりしよし梅花やといふにはひ油やが我にまらせしを不便やといふて難波へゆく氣を又一家の女郎玉川といふお馴てそれほさ切に思ふてくれた女郎を尋ねもせず丸一年打過ぬ此度よきつるでとはいふやう悪いつるでといふやう是より難波に行てふどころにある二百兩だけおふてやるべしと難波のかたへと心ざしかく川の宿を過て並木の松原はてしなく往來の人もたへて晝ながら物すこくそろく行るゝ所に一里塚の一本の茂りし陰より鬼共いふべき大の男面体は罷たらけにて鎧に車もかけそふ成大刀一本くいのぬき搦にしていぬかくと街道へ出友成の行る道とよさきコレ旅人酒手といふはふる。此大刀のこじりのつまつた浪人もの瀕命に及ぶ所をふどころな金出してすくふてくたはれならぬとある言葉聞とすぐにばらして懐中の金のこちのものぞわ一ツ二ツの絶命の場とちどちが中間は室からこのさきの宿迄にたよそ八百人もあつてふどころの中に金何ほぞ入てたいやるといふ事早速に中間からしらせの有てそなたの懐な金高貳百兩余ある事は知てゐる壹兩不足しても申請ぬ包のまゝ出さつしやれいやなら命申請るとさきから出れば友成さよじとしてかくるふにも金高を知らぬふからは隠じられませす所詮先手を見しらせて



くれんど。まゝよく知た。成はど人手に渡らぬ新小判貳百兩。懐にあたりめある。ほしくばやらふ
 といひしな。引被て打かけ給ふを。ひらりとばづせば。並木の松に切付ぬかんとし給ふ間。い
 なづまより早く。うしろへまわり。兩足かいて友成を。何の苦もなく打たを。しやがて上にとうど
 のり。段でてんがうしてよいさまと。懐へ手を入。貳百兩を引出し。腰成細繩にて友成をいまし
 め。引起して松の木に束りつ。打切て仕舞はやすけれど。貳百兩取たからは。金の代りに一命と
 ゆるしを。通りの者に断いふて。どいてもらへと。金引かた。び並木の松のうしろより姿も見せ
 ず。逃てけり。友成無念かぎりなく。齒をかみ。しだんだふみたまへ。後手にゆい付られ。エ、せひ
 もなや。方便とはいひながら。是まで奢し天爵ならんと。涙をながし。はする所へ。くは。残ねら門
 兵衛綿にて顔をつ。隠たる女をうしろにた。い。一さんに走來り。友成の様子を見て。肝をつぶし。
 女をあたりへ。たろし。置やがて友成の繩をどけば。女を深取。是のさふまた御休成ぞや。わらこ
 ねまへを。またい。廊をぬけ出。御跡をまかひ來りし所へ。親方より追手をかけられ。すでに引も
 されんとせし。門兵衛さまの御見付有て。ぐる。口の男共を。追ちらし。是迄負て來て下さん。また
 よ。御禮を。たつ。まやつて下さん。せ。まづ。あいまして。うれしいと。取付て。置ければ。友成も涙をこ
 ぼし。是迄またひ來られし。心底。深からずと。扱門兵衛にもかひ。な。ざる。縁もなき。某にかく。や。で

の心ざし。過分のいたり。ふたし。び本國へ立かへりな。ば。此恩の報すべし。我兄ゆへに。身をわさ
 放埒もの。あな。し。親の勘氣を得んと。思ひしに。念願と。い。き。勘氣を得たれ。き。も。い。まだ。天道の御心
 あか。な。こ。ぬ。ゆ。へ。か。此。海。道。の。と。つ。こ。め。に。仕。負。貳。百。兩。の。金。を。と。ら。る。の。み。か。繩。め。に。迄。及。ひ。而。目
 な。き。跡。を。見。せ。近。比。は。づ。か。し。う。い。と。次。第。を。語。給。へ。ば。元。來。こ。ら。へ。ぬ。性。成。門。兵。衛。よ。扱。此。道。に。徘徊
 する。追。剝。め。が。金。を。取。て。あ。ま。つ。さ。へ。繩。を。ま。て。か。け。て。い。か。い。ま。た。遠。く。へ。は。に。け。の。く。ま。じ。追。か
 けて。貳。百。兩。を。取。戻。し。て。進。す。べ。し。御。兩。人。は。早。く。是。より。明。石。の。方。へ。御。越。わ。れ。取。か。へ。し。次。第。跡。よ
 り。追。付。申。さん。と。い。ひ。捨。に。し。て。走。ゆ。け。は。是。く。金。子。は。く。る。し。か。ら。ず。ひ。ら。無。用。と。聲。を。か。け。て
 止。給。へ。ど。耳。に。も。入。ず。か。け。ゆ。け。ば。ど。か。ら。は。愛。に。も。わ。ら。れ。ま。じ。門。兵。衛。指。圖。に。ま。か。せ。明。石。の。方。へ
 行。へ。し。と。花。前。が。手。を。引。道。を。た。つ。ね。て。足。に。ま。か。せ。て。行。雲。の。月。も。あ。か。し。の。は。ま。な。ど。り。と。も。な。ひ
 め。か。せ。給。へ。け。り。思。ひ。も。よ。ら。ぬ。仕。合。に。往。還。の。晝。働。さ。貳。百。兩。の。小。判。の。主。と。成。し。と。數。の。小。蔭。に。座
 を。く。み。十。兩。ツ。なら。え。さ。わ。是。か。ら。商。に。取。つ。き。命。が。け。の。盜。人。の。商。賣。と。や。め。ふ。か。但。し。是。ざ。り。室
 津。に。て。一。生。の。思。出。に。大。夫。を。買。て。ま。た。い。事。ま。て。あ。そ。ば。ふ。か。と。余。念。なく。悦。て。る。所。へ。門。兵。衛。此
 邊。の。案。内。は。知。て。る。晝。ぬ。す。人。の。か。ら。み。所。を。う。そ。く。か。ぎ。ま。は。つ。て。此。數。蔭。に。來。り。見。る。や。い。な
 や。つか。し。と。行。で。り。や。時。分。が。ら。よ。い。物。を。深。山。に。持。て。る。我。等。叶。は。ぬ。入。用。あ。れ。ば。此。小。判。借。て

もくと並置しを引あつめてつかまんとする手を取てつきのけ此街道にて命を的にかけて働
く熊坂長九郎といふ盗人の大將其上をもかんとするをのれはよつほど肝のふとさ奴此邊で
は見ぬつらじやがいかにしても其丈夫な根性も見込あれば身が組下りしてとらせん我等が
下知をうけてずいぶんはたらは働の功によつて過分の分口をやるべしといへどぞりやうれ
し以然りまづ弟子入の手見せに盗賊の大將が手にある小判をうばひ取て盗人中間の感狀に
せんさの見事に渡せわたさぬと此溜池の泥水のますがのまぬさきに渡さぬかと腕まくりし
てかかれは言葉やとらかにいふゆへにづけあがりのした大ぬす人先命に南風が吹づけてか
わいや腐が来るなどいふ詞の下んだんびら物を引抜て打かけるをびらりとほづしおて身を
あやればうんとおるを引かへて溜池の中へ打込金子残らず取集えふところへ押入定て二
人の衆が心許なふ待かねてゐるべしと跡をたひて走行は熊坂と名によばれたる盗人の
骨張もつよい者に出合ては叶はず溜池より泥まぶれに成てやうくこひ上り着たる布子の
阿袖をしぼんとかく部きた金は身にふさこぬさふな世にはさつゝい奴があると思かけて行衆
象もなくづらめしさに小判ならべた跡を見て小判懸しやはいらはらとぬれ手で粟の段の
止るもかなるもくはねと高揚枝の格とあかしかりき

第五 住吉屋に先行ておれにて待申さんかならずや

其比江口神崎とて色里の惣本寺今の吉原島原のごとく大夫天神花をかざり時々くわけや軒
をならべて外につゞく女郎町もなかりしに難波江のあしさを省き上もの揃へて一軒に四五
十八づつも見せかけつじあげやの家くも普請に美をつくしてまた生壁のかさきもせず
檜くさい座敷に敷並べたる備後表とつさうとして客の顔も日々に新なる新町といふ一くる
わ近年のはやり出資賤の通ひ絶えず次第にあきはひ今此里につゞく遊興所いなくて分て夜見
せの繁昌關の夜のひやうたん町へさしかりあその宮の友成門兵衛が来るかと待明石より
せふ事なくて花前を伴ひ以前馴染し下の關の巴といへる女郎我もへつとめせざりとして親方
か難波へ又賣にして今は此里につとめぬるよしおはれちよと成どわいたいと花前にもかく
さず咄して巴にわひにばかり立寄給ひ此里の繁昌の体を見て肝をつぶされいつからかする
色所は出来けるぞ二三年前に西國筋の色所を捨て愛へ来ておそばふもの残念千万今かく
なるは元來覺悟の前とはいひながら第一は方便のあそびわんまり成奮進心にまたがへし
女郎の存念もたそろしつれなき口舌を仕かけ飛湯玉をながさせ寒夜には心中じやといひせ
て裸にしてたすませ秋夜に納戸食をくはせず物成男には邪广してあはせずかくす事迄

かたらせ。後には賣日もつとめず。宿へ内證の借銭させ。懸にせめつけ。毎刻付の届をさせ。情を
 わすれ。哀をしらす。無理をたくみ。なげきをこしらへ。幾女郎かもだつかせし。其身女の好る器
 量の上に。金銀に事かぬ。我等心のまゝ。のあそびに罪をつくらせし。報來て。つばね女郎にあふ
 ほぎのとした。錢さへなき身となれ。巴ばかりにはちよつとあふて。せめて一言の禮をいひた
 じ。あなたこなたの。格子をのぞき見るに。大勢並る中にて。櫻は花にあらはれ。水ぎはたつて
 巴が。艶色少物思ふさまは。たゞ海棠の睡れるがごとし。友成かぶろを。招てあの五番めの。惣鹿子
 めして。ござる大夫様の。お名は何と申ぞと。へば。あなた山吹様申。扱は巴といひし名により
 て。爰では山吹と呼にや。我木曾殿の。落口深田に馬を。乗こんで。わどへも先へも行れぬ段かぶろ
 に名を。聞て。あびて。あそぶべき力もなく。厚うかゝりて。山吹様。旗ものに。たばこ一ふくの。御情
 と。言葉かけられ。やはらかに。て。御口には。あふまいけれ。古金襴まがへ。のたばこ入あさせる。取
 添持て。立格子より。持出す。逆の。お情に。同じく。ばす。いつけて。下されかし。といふ。聲を。ふやらなつ
 かしい。こわいろ。と。格子よりの。ぞき見て。やあまへは。友様では。なにか。手を出して。手をとれ
 ば。今あふも。めんば。くなき。事ながら。我ゆへ。此里へ。來ての。つと。まとは。どくより。聞しか。を。親の手
 前段々。首尾に。成て。屋形の大も。ぬ。家中の。さ。は。ぎ。な。一。ッ。出。事。な。ら。ぬ。や。う。に。さ。び。しく。吟。味

役へつまで。心には。わすれずして。如在に。成ぬ。おまつさへ。首尾の。仕舞が。着の。儘にて。勘
 當た。よる。べき。方も。なく。行さ。きの。當所も。なく。さまよひて。爰に。來れり。と。立ながら。に。一年半の。積
 る。は。なし。つま。んで。高計を。語るに。山吹。涙ぐみ。て。さ。ふ。また。事。があ。つた。なら。ば。是。迄。私。か。た。へ。御。音
 信の。なき。は。御。尤。ま。づ。ゆる。り。と。御。咄も。承り。私も。申。度。事。あ。れば。口。けて。念。比。成。住。吉。や。と。申。あ。げ。や
 あり。われ。へ。參。ら。ん。と。か。ぶ。ろ。た。つ。野。へ。さ。つ。と。多。書。て。住。吉。や。く。と。ま。や。か。た。へ。つ。か。は。し。い。さ。れ
 供。ま。て。と。其。ま。し。内。方。ま。り。て。表。へ。出。れば。子。細。は。あ。げ。や。で。語。る。べき。が。そ。ち。に。成。替。つ。て。是。迄。心
 づ。か。ひ。に。成。し。女。郎。我。ひ。ど。り。行。を。せ。め。て。は。道。の。伽。に。成。共。と。親。方。の。手。前。を。ぬ。けて。爰。迄。つ。いて。來
 て。くれ。た。女。郎。の。つ。れ。あり。此。よ。ね。を。も。同。道。し。て。行。たい。とい。へ。ば。御。断。に。や。及。ぶ。べき。と。な。さん。か。
 よ。ふ。こ。そ。ぬ。し。の。れ。ち。め。を。見。と。けて。くだ。ん。ず。と。怪。氣。が。ま。し。き。氣。色。も。な。く。て。い。さ。も。ろ。共
 に。と。片。手。に。は。友。成。片。手。に。は。花。前。を。引。つ。れて。住。吉。や。へ。行。ば。く。と。ま。や。の。れ。なる。は。く。つ。ぬ。ぎ。迄。む
 か。ひ。に。出。御。珍。客。様。の。よし。大。座。敷。は。地。の。お。客。の。大。寄。裏。の。小。座。敷。へ。成。とも。と。申。せ。ば。そ。こ。そ。こ
 つ。そ。り。と。して。よ。けれ。と。く。は。ま。や。に。案内。さ。せて。裏。へ。通。り。下。の。關。にて。浮。名。の。立。し。は。此。御。方。ど。か
 ね。て。咄。置。けん。友。成。を。引。合。す。れば。コレ。ハ。大。夫。様。の。御。身。に。か。へ。ら。れ。て。お。い。とし。が。り。しも。にく。か
 ら。ぬ。殿。ぶ。り。私。共。さ。へ。あ。は。れ。れ。や。ぢ。が。なく。ば。と。思。ふ。は。どの。姫。の。す。く。風。と。客。に。あ。ぶ。ら。を。の。せ。さ

すわいさつ。扱此女郎様はとどへばまだ私もまみくどちかつきになりやせぬ友機あゝの女郎
 はと聞ば室津の花前といふ大夫かりそめにあいなれ。またなほともなきに。まかの所を是迄
 ついて来てせじになる。と引合せば山吹肝のつふれた顔つき成しがく。とまやか手前を思ふて
 か。ありへか。しりのあいさつすんで酒に成互に久しぶりの盃まづもるりと御かたりあそばし
 ませと。勝手へ立たる跡にて。山吹花前に取つき。そなたはちいさい時。たまゆんといふて。親との
 名か。津山道宅といふ目醫者であらふが。と。つてもよふ御存。まやが。たまへは。もし長門の姨様
 のかたへ。御養子にござつた。じしが。姉様の。おちよ様ではないか。といへば。いかに。も。そ。なた。の。姉
 まやと名乗あひて。互に袖をぬらしけり。友成手を打給ひ。扱もふし。ごに。兄弟の。對面。血筋。とて。顔
 の。かつ。かう。形。氣。迄。が。巴に。似た。女郎。と思ふ。から。な。づ。み。出。せ。し。が。似。た。こ。を。道。理。な。れ。一。向。二。人。な
 がらに。遠慮も。なければ。山吹も。花前も。心。に。へ。た。て。なく。彼。松。風。村。の。昔。も。か。く。や。と。友。成。を。行。平
 に。して。兄弟。指。合。く。らす。に。並。へ。枕。して。い。と。し。が。り。ぬ。山。吹。妹。に。向。ひ。我。は。姨。君。の。頼。に。人。參。多。く
 用。られ。本。復。め。れ。ども。此。藥。料。に。氣。を。いた。み。給。ひ。又。御。病。氣。も。再。發。す。べ。き。様。子。何。と。ぞ。御。そ。く。才。に
 て。置。ま。し。た。さ。に。替。置。死。して。下。の。關。へ。我。ど。わ。か。み。を。賣。に。行。て。身。の。代。を。以。て。母。の。辛。苦。を。た。す。け
 し。が。そ。な。た。の。事。は。兄。熊。左。衛。門。殿。道。な。さ。勝負。事。に。親。の。跡。を。打。て。み。ま。だ。其。上。に。そ。な。た。迄。室。津。へ

賣て打込給ふと。母さまの方から。下の關へ。下。下。されて。か。な。し。う。思。ひ。ぬ。れ。と。我。身。さ。へ。ま。ま。ら
 め。つ。と。め。の。身。そ。の。うち。母。さ。ま。にも。兄。様。の。事。を。氣。に。して。た。果。な。さ。れ。た。様。子。も。聞。し。が。此。兄。様。は
 其。儘。古。御。に。の。ら。る。や。と。涙。な。が。ら。に。尋。ね。ば。私。を。室。へ。奉。公。に。や。ら。れ。て。其。金。取。て。母。を。捨。て。ふ。た
 び。歸。給。い。ね。ば。と。こ。あ。さ。ふ。し。て。ご。さ。る。や。ら。今。日。迄。居。所。も。存。ま。せ。ぬ。と。つ。ら。ま。身。の。上。咄。して。兄
 弟。は。た。く。涙。の。み。く。れ。て。あ。れば。友。成。不。興。し。我。色。所。へ。通。ひ。初。て。け。ぶ。の。や。う。な。あ。け。や。の。坐。敷。で。う
 れ。以。事。を。見。た。る。事。な。し。過。さ。り。し。事。を。い。ふ。て。な。げ。く。は。粹。共。に。は。似。合。ぬ。一。時。で。も。う。さ。を。忘。れ。て
 遊。ぶ。こ。と。命。中。の。た。の。し。み。な。れ。と。い。さ。め。ら。れ。て。是。より。兄弟。も。氣。を。か。へ。て。三。味。線。取。て。引。か。け
 死。さ。や。ま。ま。い。の。唱。哥。も。ま。だ。う。れ。い。を。ふ。く。む。心。が。の。か。ぬ。と。一。あ。かり。に。て。さ。は。ぎ。寄。い。づ。れ。あ。げ
 や。で。の。う。れ。い。と。葬。禮。の。場。で。の。色。咄。は。つ。ん。と。ぬ。物。ぞ。か。し。扱。友。成。は。これ。より。忍。び。て。國。も。と。へ
 立。歸。り。家。老。朝。熊。左。衛。門。に。あ。ひ。て。寶。物。の。様。子。も。聞。た。け。れば。其。間。何。と。ぞ。花。前。を。其。方。か。才。覺。に。て。
 慎。成。所。へ。預。置。て。く。れ。ら。れ。か。し。と。頼。め。ば。何。が。さ。て。他人。で。も。節。の。事。女。を。つ。れ。て。御。家。老。様。の。方
 へ。ご。さ。り。に。く。き。首。尾。な。ら。ば。預。り。ませ。い。で。と。指。て。や。妹。の。事。な。れ。ば。其。段。は。少。も。御。御。づ。か。ひ。な
 く。涉。國。へ。涉。歸。り。あ。そ。ば。し。何。分。御。首。尾。の。よ。い。や。う。に。と。今。に。始。ぬ。山。吹。か。心。ざ。し。然。ら。ば。國。か。た。の
 様。子。次第。に。兩人。共。に。む。か。ひ。を。こ。す。べ。し。と。夜。と。共。に。名。殘。の。酒。事。して。曉。方。に。は。兄弟。共。に。涙。に。く

れて松浦佐用姫がひれふりし昔もかくやと友成の姿の見ゆる迄大門口に出て涙にひたす手拭にてまねく有さまあはれに情ふかくぞ見へにける。

第六 一聲の投節も實名を得たる松の果

狼狽野に驚時獵師手を拱て幸に獲と古人のいへることく友成公勘氣をかうふり出給ふ時節を見て是究竟の所と倭臣雲川大膳様々に讒をかまへ父子の間をさまたげふたゝひ歸參なさやうに巧けるはをのれ此家を押領せんがために段々あしさまふいひ上げれば父友方いよく立腹あつて友成万一國へ歸り來りしをかくし置て憐愍をくばへなば其人共に勘當と諸家中へふれられ則大膳倅源藏を吟味役に仰付られ遠慮なく家中の家へはいり隈と迄さびしく兪穢多ければせつかく友成朝熊が方へ忍びて來り給へ共暫時も滞留なされがたく朝熊左門御領分をこなれし懸意の禪寺へ子細をいひてひそかに頼み此寺に忍ばせ置時節をうかいひ仇に月日を過しけり友方公も老年に及び給へば跡目の事を御心にかけられ過去給ふ御靈所御在世の時都羅形中納言殿の御息女花園姫を嫁公お御契約なされ置れぬれば見だいの御言葉を立られ花園姫を娘ご分にむかへられ然るべき公卿の公達をむて君に入られ夫婦になして伊家をゆづられんと思召宇土の長濱に新に下屋敷を立られ花園姫を移し入參らせ

られ則御守として雲川大膳下屋敷に晝夜相詰むたりけり萬自由の都にそだち給ひぬれば鄙の住居さぞ伊氣もつまるべきにかやうの伊懸にても伊心まかせにいたさせ申べしと友方公の仰付られにて御家中の内儀がたを兩人づゝ毎日毎夜入かはりの御伽がてらの御番に付られ國中の音曲者はいふに及ず都方も舞子共を招かせられさまくの御遊興榮花の盛と見へにけり是に引かへ友成公と我國ながら國人に心置れ編笠ふかく人めを忍み朝熊か宅へと心ざして此新屋形のまへを通られけるに松風の音につれてわけらしき三味線の音是れいと耳をすまじ愛らは魚取獵師ならではすまざる所成しに誰が此地を拜領してがくる風流成屋敷をたてけるぞと三味の音のする方を見やり給へば海を見はらすた先の亭高くぞふもいわれぬ女の腰にてうたふ小哥の唱歌を聞ば室にて我等さはぎの時分花前と床の中にてふたりこしらいたる分れのさぬくといふ歌相の手まで花前がつけてなくさみまがそもたれがならひ得て此所の女への教へけるぞとしかも花前がこはらるまでうつせる事のにくやと堀際によつてまげし聞入ておとする折ふし内よりろじの戸をあけて禿めきたる女童出るを見てちやつと笠をかたふけ行過んとま給ふをかのかぶろうしろから袖を引てコレ友さん大夫さんの亭から見さんしてよびましてこいとこの事で参ましたくるしうない所ややほどにてちへ

御といひなされませと引とめゆるをふりかへりてこれば室津ふて花前がつかひしかぶろの
 久米彌なり。是とまたり。そちはさふして此やかたにはゐるぞとへばまだたまへは大夫さん
 の事をえらすか。花前様はいつぞやたまへ室から御勘當の御身にならんして。あげやからす
 ぐに御立のさなされた跡をえたふて御出なされ。恥やかた殿から遣子をかけられしたれば。
 男伊達のくこんねら門兵衛が。大夫様をかこい。追手の者を打ちらして。いづくへかつれまして
 ゆかれしゆへ。それから親方殿が諸所へ人を廻して尋させられしに。此中難波の新町にて見付
 出され。親方同士につめひらきに成てくるわをかけ落の女郎に極つたゆへ。新町から取戻して。
 つれて歸るし道にて。御屋敷へ都から姫様の御入なさるし。乗物へ。花前様の行わはんして。
 其儘かごからとびをり。私はおその宮の友成様の。妾にてさふらへ共。親方持にて金の爲に又
 うさつとめめ身にかけります。歴々様と見まして。れたのみ申上す。廊へ歸らぬやうに親方殿
 へ。多言葉をそへられ下され。友成様にねめにかゝる迄。ねこしもとく思召て御かくま以下さ
 れど直に御ねがひなされましたれば。ね情ふかいた姫様にて御供の御侍衆に仰付られ親方ご
 のへははるし程に金を下され。直に此に屋敷へつれて御入あそばしまえて。手前のつさくもの
 ものは。そなたのつかはるし。勝手あしからふ。手まはり。今迄つかはれたものを。迎の事によび
 よせて。えんりよなふつかはれと仰られ。私まで大夫様と同じやうに請られて。此御屋形にねり
 ます。今たまへをあの亭から大夫さんの見付さんして。あの塀際に立てこざるが。咄申ました。
 私とふかい友成様でござるとねつえやりまえたれば。それがそなたをかくまふてゐるも。その
 ふかい殿ごにあこせふとねもふての事なれば。さいわひの事せひに是へよびましやどの仰に
 て。ねむかひに参りました。ざりとこくるしうない所でござんせと。段々の様子をかたり。いざ先
 是へねはいり。袖を引ば。扱も思ひがけなき所に。花前のかこはれぬる事。難波にて姉の山吹
 に預け置てゐら。なしてさへとはざりしが。さぞや山吹は。花前がくるわへ。歸りし時分は。なびき
 つらん。何と花前が方より。此屋形へ。のくまわれたぞいふ事は。新町の山吹といふ。太夫の方へ。
 ふてやつた音は。聞ざりしかと。へば。成はさそれには。氣づかひなされませ。な。さつそく。太夫様
 から。ほなを進せられて。大坂の太夫様の。安堵なされて。は悦でござります。花前へも。此わけを
 多して。成共しらせました。いと。毎日ねつしやつては。ござれを。ここにござります。ござり所が
 しませぬ。へに。此間は。ゆかしい。と。遊ばつかり。ござります。ひらに。ねといひなされて。
 太夫様に。久しぶりの。ね顔を。見せて。下さりませ。さ。な。いと。愛は。はなし。ませぬ。たも。どに。しが
 みつ。いて。は。な。さ。ね。ば。女中。斗り。と。あれば。ちよつとは。いりて。花前。にあふて。来て。も。くる。しか。る。ま。

よせて。えんりよなふつかはれと仰られ。私まで大夫様と同じやうに請られて。此御屋形にねり
 ます。今たまへをあの亭から大夫さんの見付さんして。あの塀際に立てこざるが。咄申ました。
 私とふかい友成様でござるとねつえやりまえたれば。それがそなたをかくまふてゐるも。その
 ふかい殿ごにあこせふとねもふての事なれば。さいわひの事せひに是へよびましやどの仰に
 て。ねむかひに参りました。ざりとこくるしうない所でござんせと。段々の様子をかたり。いざ先
 是へねはいり。袖を引ば。扱も思ひがけなき所に。花前のかこはれぬる事。難波にて姉の山吹
 に預け置てゐら。なしてさへとはざりしが。さぞや山吹は。花前がくるわへ。歸りし時分は。なびき
 つらん。何と花前が方より。此屋形へ。のくまわれたぞいふ事は。新町の山吹といふ。太夫の方へ。
 ふてやつた音は。聞ざりしかと。へば。成はさそれには。氣づかひなされませ。な。さつそく。太夫様
 から。ほなを進せられて。大坂の太夫様の。安堵なされて。は悦でござります。花前へも。此わけを
 多して。成共しらせました。いと。毎日ねつしやつては。ござれを。ここにござります。ござり所が
 しませぬ。へに。此間は。ゆかしい。と。遊ばつかり。ござります。ひらに。ねといひなされて。
 太夫様に。久しぶりの。ね顔を。見せて。下さりませ。さ。な。いと。愛は。はなし。ませぬ。たも。どに。しが
 みつ。いて。は。な。さ。ね。ば。女中。斗り。と。あれば。ちよつとは。いりて。花前。にあふて。来て。も。くる。しか。る。ま。

とど色にひかれて禿にぬなひさせ。内へ入給へば花前侍うけ夢でこないか夢ならばさえてくれなど。まづ取ついでうれしいにも先だつものは涕みて袖をぬらしける。友成も泣まいとたしなみ給へど。太夫が涕にさそはれてともに涕をながし新町にてわかれてより此かたの互に咄とつきさうり。御次の間に仕かけし時斗八ッをうては女中の聲として千種さまは番がはり幾瀬橋の御出と申さとして互に女中のつめひらさ。此姫様も御さげんよう御入あそばしれうれしう存ます。扱是からわらはが替り番御歸あそばしてゆるりどれやすみなされませど。女中の番替りの様子を聞て先此屋形の姫といふはたれど。又番がりの女共は何方の者ぞと友成ふしんなして尋給へば。此姫様の様子をまづかに御物語申べし番替りの女中は皆御家中の内儀方にて一時かはりに入かはりにて。あの今替られた番の女中が追付愛へも来て私共へも御わいさつが有と咄せば。ヤア家中の女房が是へ番につめるが。ごりや愛にこゝられぬ見付られてはと睡らんとま給へば。此姫様のゆゑいなされたいと有て。御歸なされぬやうに最前にはいりなされしろぢの戸には鎖をたろさせられて今で御歸なされたふても成にくし御家中の伊内儀達にゆゑいなさるゝ事がたいやならば暫く是に忍びなされませ。番替りの女中が是へ参られ私にあつして出られては又替り女中のござる迄は見へませねば其間御隠れな

されてござりませと夜具の入り押入へ忍ばせ。其身の三味線取てまづかにまらへ。身を君になげふし。わいた見たさは飛立斗籠の鳥にはあらて押入の内おいとしやぬしは鴻が看經。

第七 今こそ不審春の日の光り渡る小判盗人

それ耳娛む時は慎み心騒る時は怒にすべからず。といふ古賢の箴をわきまへず。出陣外に肩をならぶ者もなく。猛威をふるひ。是より雅意にまかせて返逆を思ひ立忍びく。に諸浪人を召抱へ。天へのぼる心地せし。雲川大膳が隠謀ひとへに一跡断滅の基をまねくにたりと。權威に恐れて與はしながら。心中にあやふむやからも多かりき。主の罰をかうふり。追付淺ましき身と成べき前表には名さへはだか島と云所の鎮守八幡の宮の拜殿へ密に寄集りて。謀叛の密談をなしぬ。新参の家來硯川筆右衛門。此社に来て大膳に對面して申けるは。内々仰付られぬ一方の大將にも成べき軍略鍛鍊の浪人を尋出せとの御意によつて。諸所方々をひそかに尋申。一人の壯士をかたらひ。誘引仕いと云ば。幸ひく其者はへといふも早く。彼浪人大膳が前にかしてまゐる。雲川見。其方は軍術鍛鍊の人とさけり。我此度。旁のやう成武略に達せし浪人衆を。密々にかしゆる事。自立の志あるゆへに非ず。我等主君常阿蘇の友方公の御惣領に友次郎殿と申御方あり。是ハ都にていやしき妾の腹を出生ありしとて。御本妻御國へ入られず。御實子の御

次男成と申へ家督を譲られし所に友成色欲大酒を好まれ人望に背不行跡親殿の勘氣を請られ當分國を御立退あるといへ共外に家督を進せらるべきは公達もなしと此節御惣領友次郎殿事を思召出られもせざるを御恨に思召某をひそかに御頼にて御謀反をふこされ軍勢をかりもよはして急に御屋形へ取かけ一時に勝負を決して御家督を押領せんとの御企親に對して弓をひく非道の思ひ立のやうに我人思ふべけれ共是は皆親殿の本妻にまのれ給ひ嫉妬にて妾腹の惣領を國の中へも入られずあまつさへ知行の一所も進せられず都に捨置る、と友方公も同じやうにかくのごとく捨て給ふは道ならず御惣領友次郎殿の御身にまては御無念に思召は理俗のたとへに腹ばかり物種はまされもなき一城主の友方公の御子せひむはんをこれし家國をのつとらば父を國內に隠居させ孝行をつくされんどの思召入なるによつて某御長男友次郎殿の御下知を請て夫故をのくをまねさかへ申事也軍初りなば随分粉骨をばくさるべし扱軍略たれんとあれば此度の軍の元師とたのみ申べし浪人とあれば定て不自由がちに有べし何にても用事あらば心置なく策右門迄申さるべしと念比にいひければ浪人首とさげ誠に忝き御意本懐の至りとや申べき某幼少より兵法劍術に身を委凡三略六韜四十二人の秘法陳制八十一變順逆百廿八變千變万化の奇法ことごとく通達仕

以得ば軍略に於てい只今太公望張良など出現有て問答仕共中々まけはいたすまじと廣言を吐ければ大膽大に悦喜して誠に万卒は得安く一將と得がたしといへるにかゝる器量の人を招き得る事友次郎殿御本懐をどげらるべき吉瑞悦入ていぞやまづ大將友次郎殿へ目みへをさせ申さん則新宅の下屋敷に忍ばせ置奉れり我等只今同道申さん扱名は何と申人やらんと尋ければ某と山丸郷右門と申者にていと實名を名乗先契約の爲とて神前の御酒にて盃を取むすびすぐに長濱の下屋敷へ誘引してこそ行にけれ左關番の侍共殿の身入よりは恐れて大膽と見るより其儘飛下り土に手をつき平伏す大膽見て大儀く扱姫君にはいよくはさげんに渡らせ給ふか番がはりの女中は懈怠なく相つとめらる、やと一様子を聞て常の居間へ入れれば屋敷預り詫摩軍太左衛門罷出大膽に對面す大膽則召かへし山丸郷左衛門を引合せ是は今日と味方へ招し御浪人以後は心安く申談せらるべし此仁は軍太左衛門殿と申て身共らが傍輩此度大將友次郎殿思召立に與せられたがひふ心底殘さず入魂にいたせば貴殿も心をさなく密事を示し合さるべしと挨拶すれば兩人共に互に策は別心なく申合すべしと近付に成ぬ重て大膽申へすでに大將友次郎殿へ御目見へを致させ申さん此旨殿へ仰上られ給ひるべしといへば軍左衛門承り圍の間のふすまを明半疊を上れば下り友次郎

農袖に大刀よこたへぬつと出いか成用事有て切貫を明しぞとあればさんい雲川大膳殿郷右門と申浪人をかりへられ御目見への爲召つれ参られ此段殿様へ申上との御事にて夫ゆへ切貫をひらきいと手をついて申上れば、一段く、かにも目見へを請へき間大膳に誘引して来られよと申せとあれば、畏て罷立かくとへば大膳郷右衛門を伴ひ御前に畏り一方の大將にも相立申べき軍器たれんの山丸郷右衛門と申浪人君の威名を承り此度の御役に相立申度むねにて望んで伺公いたされいと申せば友次郎寛々と打笑軍略の達者どあれば一しつたのもし委細は定めし大膳が物語にて聞えし本意を達しなば恩賞過分にあたふべし随分忠義をこけむべし先以かつかうたい、一方の大將の器備はり重疊くくろしからぬに、手を上ちかくへよれと大やう成ことばづかひ誠には有がたき仕合と郷右衛門顔を上げて友次郎の面体を見て大きにおどろけば大將友次郎もけしきかこり互にすまぬかはつき大膳拜るより心得ず、憚ながら殿の御氣色俄にかはらせ給ふは何とぞ子細いやと尋ねれば友次郎眼つきぬれる体にておの者は我流涙の節に出合遺恨ふかき者なれば、たしかくゆる事無用くといひければ大膳申は殿さま御流涙の中に慮外くはんたに致せし事も有べけれ共夫々今日の殿様ごんふ事をしられぬ以前たるべし郷右衛門様子をつくす申さるべし、手前の大事を

らす咄と一旦頼たる人と以前の遺恨によつて御いとまを下されんどの事は、憚ながら大膳を思召たつ大將の御言葉共覺へ充大行は細端をかへかみすと申小事にかはつて大事をわやまう給ふべからず郷右衛門殿の遺恨に思召昔物語をいたされ某承てついでに御赦免の至を下し置るしやうに取持申さんといへば郷右衛門額に汗をながし某武者修行にはたよりて勝負を心ろみの中にしばらく播州に滞留の刻所の男伊達とて合兵法、軟取手にもつはすはけみい故件の間へは入くはんね、門兵衛と名を改め罷在い、飯殿御流涙の時にていはん熊坂長九郎と申、恐れながら人の物をた、取御商賣を成れ、旅人の凱付金貳百兩うばわせられし、旅人某を頼し、追のけ取もどし、憚ながら溜池の泥水少斗指上、此御遺恨によつて、只今御はなをつき申、武士の漂泊仕る中は、辻切強盗をなすは殿様に限らず昔より有ならひ、龍は泥に蟠、龍盤魚夫侮る、蛇成かな、蛻成かな、安ぞ龍の志を見んやと、楊子が方言の如く、其時は君の龍たる事を知、龍盤魚の類ひの某慮外くはんたいは龍盤魚の交の時にていへば、今日龍たる御身の上にて、古の事を御しらす下され、御いとまを下し置る、の上は某も又大將と御たのみ申て、たもしろからず成はせれいとまを申請と、いかる所なく申ければ、大膳郷右衛門が此言葉を聞て、あつこれ至極の勇士、信ふもれとらぬ名士と、心中に悦ひ成はせ

殿の申さるゝ通侍の切取強盛とつねの事かゝる鎖細成事御かゝり成るゝは、大丈夫の大將とい申されず。いよく向後忠功をつくさるべしと。則大膳酌に立て、主従の契約の盃を取むすびさせ申。小音にて祝儀をうたひ、又切貫の板を取て、友次郎を床の中へ忍ばせ。其上に半疊を敷、右衛門を伴ひ、又もとの居間へ来て、軍太左衛門交に酒を飲んで、傍輩の因を結びけること淺からぬ

第八 生としいける物毎に夫をまたふの嫁のならひ

それ虎の能衆の獸物を恐れ、積せしむるも、爪牙有故、もし爪牙を脱とさば、虎還て犬羊の爲に侮られなん、人臣と又君の威を借て、爪牙として、人を威す者は、其威を失ふ時は、却つて其怨の爲に害せらるゝ事を、まらざる大膽。今主君の威をかり、一家中を下につけ、猛威をふるひ、我まゝを行ふといへ共、人恐れていふものなく、日々に惡逆超過して、人を人共思はず、かりそめにも珍肴珍味をどしのへ、大酒にてくらしめ、今日も郷右衛門をもてなしの爲に、下屋敷を我物にして、様々の美食をどしのへ、軍太左衛門交りに、姫君の方聞ゆるをも憚らず、酒宴をなして、あそぶ所へ、殿々御用ある由にて、御上屋敷に召ければ、主持といふものは、心の儘ならず、たもしるゝ所を中座いたして、罷在追付參らふ。それ迄は、軍太左衛門、必ず盃を取まらざと、詞を殘して、出行

は、郷右衛門は沈醉に及び、扇を枕にせしが、いつと無いひき出で、軍太左衛門耳に入て、あらふじきや。此切戸も奥へは男たる者は、入事叶はざるに、何奴が、つもの間には、入まやらんと、さし足して、ふすまに耳を當て、息をつめて聞たり。聞ものありとは、知たまとす。友成公は、花前がどいめる袖をふり切かへらんとし、給ふを、花前猶も袂を取て、となさず、御いひ名付ある花園を、姫と申せしを、聞て、何の様子も仰られず。歸らんとは、なざるゝと、そも此御下屋敷は、ごなたの御やしきにて、いつくごさして、歸らんとは、仰らるゝ。様子を仰さかされぬ内は、なんほうでもかへしはいたさぬと、すがりついて、涙ながりに、どいむれば、ア、わが心底を、まらざる故に、今出行んといふと、どいむるは、尤も子細を、只今打あけて、咄を程に、様子を聞ば、必ず放して、かへして、くれ抑我色遊びに、身をはめ、身持悪敷せし事は、ごちに、野しいひにくき事ながら、おながら、女郎の色には、だされ迷ひての事に、あらず。某は、友次郎殿とて、都に兄ありて、かけ腹の子なりとて、母共々都に捨置れ、庶子なれ共、本妻腹とて、某に國をゆづらんと、の御事にて、母存命の時、ひながた中納言殿の息女を、我と末々成人の後、めおはさんといひ、なづけ給ふよし、然共、我兄ありながら、弟の身にて、家督をつが、ん事道、非ずと、親殿に申すれ共、かなしいと、貴さもいやしきも、入縁は、ご心に任せぬものとなし、家國は、我質母の物成ゆへ、母最期、お殘らず、我等おゆづるかの、遺言狀をし

たしめ置れし故親殿肉身を分られたる子いづれか不便に思召愛憐にかゝる事有べければ寵愛の妾の腹より出生の兄上さぞや此一跡を我友次郎にゆづりまほしく思されんづれ共我實母よりゆづりを得たる所を遠慮有て兄上を捨て某にいよつがせんどのおぼしめしによつて我色にまよひ身を放埒に持なば必ず勘當あるべし勘當あらばつぐ者外に非ればさしづめ兄貴のつがるい定た事と思ひ様く濫行を盡せし故に我存念の通今日から勘當をうけ國を立去ぬ然るに今思へずも新規に達たる此屋敷親殿の下屋敷とも知らずそちが哥にひかれうつしくも此やかたへ入し所にいひ名付の姫我事を忘れずたとへ枕をかばさねばとて一旦いひ名付有からは外に男を持氣にあらねば幸ひ友成公許不便を加へらるる花前と聞てくつ日へ身請金を渡し此屋敷へ其方を入置るるは花前をしたふて來給はん所を取どめ夫婦の盃をさせてくれよとそちへ願われし故に夫婦の盃をさせませずしてはわらはしつとの心にて頼を籠略にすると思召れてはた姫様ふたゞされば是非夫婦の盃をせよと共今いふ通り姫と盃をまて夫婦になればばやながら此跡目にならねばならぬある時は兄上へつがせ申さんと親の勘氣迄をかうふりし我最初々の存念無に成て湯をわかして水へ入る道理なれば何分姫と盃事の扱置對面もせぬ所存故に今出てゆく間必ずとをなと始終の様子を語らるれば花前我を折扱々左様の深きけ心の中は存せし我にけ心底をたてられし夫婦の盃事をなされぬかと存違てとゆめ申せしがさりとはいふ兄弟思ひの御志及ぬ女の身にてさへ感心いたしさふらふ也さもあらば私も御供申て立退申さんつれさせ給へどなげきければ其段のともかくも我も從ひ此所を立退んと思ひいさあ連立て出行ん然し路次の戸鎖をれろし置ぬれの高擧をのりこへずしてと出られまじ我身ひとりならばたとへ十重廿重あり共とねこへて出べきがそちをつれてはこへがたし表門も出べき間其方出て表の様子を伺ひ來れど有ければ花前やがて表へ出て首尾を見んとふすまを明れば軍太左衛門耳を當て聞居たりければふすまの明につれてぐいつたりとこけかしり敷居お手をつき見合して互に肝をつぶしけり友成見給ひ珍らしや軍太左衛門親殿にはますく御きげんよくわたらせ給ふかわが國を立退て後ふ建たる此屋敷ゆへ様子知らずに入來り思ひぬ對面めんぼくなし朝熊左衛門によく心得てくれ命あらば重てあふべし大殿の事ひとへに頼むと花前をつれて出んとま給ふを軍太左衛門袴袖にすがり頼ながらちと申上度事いへば今暫く待下さるべしととゆめ申扱只今此女中へ物語あそばされし段々是にて始終承り恐れながら感涙をながしけり

け心底を物がけ承ひ上のつしむべきやうはなしとやうに親兄の體をたもんじられ御舎

兄友次郎様へ御家を進せらるべき御志しにて。わざと御身持を放埒に成れ。このんで伊勘當を
 受られし有がたき御心根とい。御舎兄様の申に及ばず。我等共迄更く存奉らず。友次郎様御も
 ほんを企有て御家老雲川大膳と之免し合され我々をいじめ。諸家中はく一味仕り。近日軍を
 罷こされ。御家をのつとらんと。御もよゆしまさりあてい。然るに只今君の御心根を承れば。軍
 に及ばず。元來御家御國を。兄で機へ進せられたき思召入。友次郎様の御耳に入なば。いか斗御満
 足に思召上られん。さ程に義を立られ。親との御不興を請れて成共御家督を進せられんと思召。
 御所存の上は。伊舎兄様へ。迎の事に御對面遊ばされ。直に仰聞られなば。いよく御喜悅あつて。
 御もほんの企を。みづから先非を悔て。思召やめられ。御運枝御もつまじく。直に御ゆづりを受
 られいへば。おはれ願くば。友次郎様と御對面を願ひ奉ると申ければ。友成聞召。我もかねく御
 對面申心底を申上。家國をわづり申度思へ共。都に住しまさすとは聞ながら。御住所を人に
 尋ねても。しらすりし故に。今日迄心にかかりながら。御對面申さず。うち過ぬ。兄上の御在所を
 其方存ぬるならば。早々我をつれ行くれよと。賊に恐入たる顔色にての給へば。軍太左衛門承り。
 左様にていは。他所にもあらず。則當屋形の内に。御忍びまさせば。某御案内申あぐべこと申
 ければ。友成大さに悦び給ひ。我はからずも此屋敷へ來り。まは念願といきて。兄上に御對面申べ
 き因縁にてあるべき。早々あんない仕れど。歡悅有事限なし。

第九

青邊敷並へたる並間より顯れ出し。兄氣が姿

半を畫て牛となり。佛を畫て佛になるも。皆是二心にとひ込たるゆへ。そかし其繪を畫し人の名
 にあなじ。院摩の軍太左衛門。大膳が進めによつて。謀叛に與するといへ共。今は友成公の眞ある
 仁心。を聞て。忽に心變じて。感じ入。兄弟對面させ申無事に御國を治んと。團の間へ入邊をわけ
 板敷を取れば。友次郎何事ぞ。床の下へ出らるれば。軍太左衛門。畏り右の次第を申上。御舎弟
 友成公へ。御對面有て。直に御ゆづりを請らるれば。取ふ及ばず。無事に御家督御手に入と。申物な
 れ。床の下に御身を忍ばるゝに及ばず。われへ御出有て。友成公へ御對面なされなば。しかるべ
 く。いはんと申上れば。成程く。其方が申分至極せり。此段大膳といか。いふを雲川が所存も。其
 方と同事かと尋ねらるれば。大膳は。伊上屋敷より御召によつて。最前登城いたされ。居申されず
 いへ共。大膳に相談申。及ばず。誰か軍を好と申者い。いんや。及に血ぬらずして。御家御國をたな
 ご。うろの中に握らるゝ事。何にいなと申べきか。幸。成國を打とづし給ふべからず。早く
 御對面有べしといへば。友成が申かた。いかにして。もうま過たれば。若さやうのけしきも。見へな
 ば。目くばせし。よた。一刀に切て。捨ん。必ずぬかるな。是へよべといひ。つけければ。承て。立出。友成公

を伴ひて出ければ、其方は我弟の友成かと顔を見てびつくりする友成も御覽じて以前室より明石へ落ゆく道にて二百兩の金をうばひ取て我を木にからめつけてのきたる追剽に面影がよく似たが扱ひ其時の盜賊は兄上めて有しやとわざと面も上ず手をついて賊に是迄御對面申さず延引仕仕段親兄の禮をうしなふ仕合御高免かうふるべし私心底之是成軍太左衛門存いへば御聞なされ下さるべし時節有て今こからずも御對面申事はに過たる身の悦びはいはず今日此國に留り給ひ阿蘇の家御相續下さるべしと有ければチ、神妙く我阿蘇の家の嫡男と生れながら弟に家をつがれ我身は盜賊を業として山野にさまよふ無念さ骨骸にとどりいかもして軍勢を驅催し阿蘇一家の人々を打取て家國を押領せんと大膽と心を合せ此屋敷に忍びゐて晝夜軍の評議をなす所に勘氣を請て成共身に家をつがせ度との存念を聞て祝着せり然れ共其方いかく仁心をつくし家と渡さんと思へ共親殿中へ承引有まじとて其志まことあらば只今爰にて腹切て我に命をくれられよさある時は他人に家をつがせんよりはと身に家國をつがざるは憊な事貴殿此世あながらへて我にゆづらんと有ても中へ親殿其方存命のうちにはゆづられまじ我ために勘當をうけ風來者お成て死ぬる命を今爰で死でくれらるればひとりと身が家督お極る本心も我にゆづらんと恐入ならばさあ今身

お前にて切腹頼むと云ければ何がさて兄の爲に命を捨る事露保でもいとひなしとも入肌をぬがんとし給ふを軍太左衛門押止先御待なさるべし君の仁心を聞給は、落涙して終に對面もせざる兄に親の命にそむきて成共家國をゆづらんと思ふそなたはもろこしにも有まじき兄思ひの弟かなと謀叛の心をひるがへしまつたく其心かたの怨みなしなごし弟をおはれも給ふ心はなくして腹を切て死ぬれば我跡とる爲によさなごしはそりや虎狼の心にひとしく人望にそむく汚言葉其御心ゆへに天道にくみ給ひて家の長男と生れたまへ共汚國へ是迄足ふとも得なされず野山を家としてござりし身の程を思ひやり給へたとへ家國を得給ふ共其御心ばせにて之國民を撫育なさるゝ慈悲心は有まじエ、あさましきは所存かな必ず御生害なさるゝ所にいとすと友次郎を諫言し友成をとりめ申言葉をつくし兩方を制しければ友次郎氣色變つて大義にわ兩親を亡すといへり此國を押領せんと大義を思ひ立友次郎幸と敵と思ふ友成入來の遙とる網に鶴のかかりしやうなもの軍勢を以て押よせ城をのつとり腹切らすも今爰にて切腹さすの同じ事慮したるか友成早く腹を切べし介錯と身がして得させんと刀のつかに手をかけ言葉あらにいひけるを花前は外にて聞より心も心ならず圍の戸を細めに明てきて大きに肝をつぶしてぐわらりと戸をあけ内へ入上座あなをつて大將ふる友

次郎がそばへつか／＼と行ヤアあなたを口しが兄の熊右衛門殿ではないか父母の存命の内はさま／＼のわるさをなされ在所中では大不孝ものとしてつきぬいておまつさへ勝負に打込でわらひを室へけいせいに賣てやつて其金取て母を捨て所を立退れいとしや母様はひとり住の村のごくまにてやう／＼其日を送りわらはがつとめする事を苦になされて思ひ死なされたあふたらば兄様なれどらまへて恨をいわふと長門のれば様所へ養子に行まやつた姉様共出合てあなたをそしつて居したが今見ばもつたい無此友成様の兄とじやといわしやるさふながそりや本氣でいわしやるか生残つた妹共にも又難義かけふと云事が友成様ありや私が眞實の兄様でござんす何をいわれませふと必まことになされて下さりますなど思ひもよらぬ妹が尻むつて出ればもうばれて出ねばならぬ場だもそれた女先が形もな偽をぬかすと取てひさのしたへ引しくを軍太左衛門見て扱はをのれば友次郎殿の似せものなるか夫共しらす大膳某も一は／＼くうて是迄手をつき頭はさびたが無念なと引ぬいて打かけるを／＼やをいさんなど刀を抜て横にいらへば軍太左衛門あばらを切れてたじろく所をたよみかけて切殺せば友成たまたらず打かけ給ふをなんの苦もなく刀ねち取花前と共にくみしきすてに兩人をさらんとする所へ郷右衛門走り來つて熊右衛門を取て引ふせ上にさうと

のつと様子是最前よりわれもてくはじう聞てある友成様に見ゆすれなされたか私はいはんねく門兵衛と申たものさやつが取たる貳百兩を取戻し跡より廻つさ落つかれます所迄は供と存せま所に據なき用事によつて延引致し其後お行衛と尋ねれ共知れざる故せひなく當國へ來りてれる様子にかさねて申へし先此所の御立退成れ朝熊右衛門殿のかたへ御入あるべしといへば友成も花前も夢の如くのこ／＼ちにて悦び給ふぞ道理なる然らば跡をよろしう頼むそなたの非圖に任せ朝熊が方へ立のく間必ずわれへ來てたまはれど友成は花前をつれて朝熊が宅へ行給ふ郷右衛門熊右衛門に繩を掛うぬめは定めて大膳に頼まれ此家の惣領友次郎に成て此切貫穴へかがんでとりしな段々僉儀をどぐる事あればまばらく命をたすけおくと三尺半拭にて物をいわざるやうに口より首筋へぐる／＼巻にして又切貫穴へ抱てれとし板敷をしてもとのごとく疊を敷扱軍太左工門がまがいを庭なる井戸へ取てはめ疊にこぼれし血をぬぐい何事もなき跡に取をさ圍の戸をしめ心の中にてさま／＼工夫しひとりうなづき大膳が來るを待てゐたりけり郷右工門がこたらさあて友成必死をのがれ給ふも仁心深きによつて諸佛神のれうこのちからをくわへ給ふゆへならんと國人つたへ聞てよろこびあへるも友成をひいさにたもふゆへぞかし

第十 さす腕には鐵炮かまへ納る手には寶を煮てやる

公用を輕し私用と重んずるの臣下の道にあらざといへども、雲川大膳は大殿御用にて御上屋敷に身の居ながら心は下屋敷にのぞきまつて、主君の仰付らるる御用の趣をそこへ承て急ぎ下屋敷へ立戻り定て酒半にてあるべしと居間に入て見れば、郷右衛門一人むつかしき顔つきにて不興の体相是こゝ最早盃はどられしか、軍左太衛門はいきつかれしやと尋れば、郷右衛門色を正うして申けるは、私には御いとまを下さるべしと何とやらん一物ある体にて申ければ、大膳さよつとして大義の計略をしめし合せ、れく其方今俄にいとまをねがはるは定て所存あるべき心慮を殘さず申さるへま、櫛子を聞て了簡すべしといひければ、某身不肖なりといへ共、軍師に頼れ明日あても軍あらば諸軍を下知して一時に勝負を決し、御本志を達しさせ申さんと存る某に御別心あつて心底のまどをわかし給はねば、君臣合體なくべつゝ成ては御本懐をとげらるる事かたし然ればせつかく一命をなげうつて粉骨をつくして其甲斐なく敗軍せし時は、軍師一人のあやまりに罷在いへば何分御いとまを下さるべしとにがくまういひければ、是は思ひよらぬ事をいひるゝ物かな、大將友次郎殿へ御参みへさせ申貴殿を此たゞ大切の軍師に頼むはさの義、何と以て別心のあるべき何者を、議首にて申せしか、旁以て心得かたしといへばいやくいやくの者が辨をつくし申せばとて、讒言など聞こむ郷右衛門にては、いす何とて拙者へ雑兵なみに爲を仰らる、はかりながら諸軍勢の司を承れば、戰場にのぞんでは君命をさかす皆將よりいづ敵にのぞんて戦を決す二心ある事なし、主従互ひに疑いあつては大事をなす事有べからず、このもしからぬ人を頼みて死力を盡さん事は、河豚のの毒にあたつて死するがごとし、阿蘇の御敵、男友次郎といふ似せものをこしらへ某を欺給ひ、別心なきといふや、されまじ善にもせよ、惡にもせよ、かくのまれし上は心力をつくし、貫公の思召たつ大望成就あるやうに案をねり、肺肝を碎て御爲に成いやうにいたし申さんと存つめてとる某に、御心の底を打割て御聞られぬたのも、まの所を見極めれいと、な中請ると、面色かへて申ければ、むすれば、友次郎といふものは、こしらへものといふ事を何ものを耳打しによつての腹立と見へたり、是には段々櫛子有心をまつめて一通りを聞てたべとめいやくさうに云ければ、いや、さ人のや事を聞こみ、立腹仕るやうなる郷右衛門にていひはすの似せものめとも、播州の生れにて二親に不孝にして、妹共をけいせいやへ賣人望に背きたるよこしまものさやうの不實成者をかゝる大義の企の大將、拵置るゝは雪を以て人形を作りもへる火へむかふに同じく、たちまち大事他へ洩て身を失ひ給はん、笑止さ

しか、旁以て心得かたしといへばいやくいやくの者が辨をつくし申せばとて、讒言など聞こむ郷右衛門にては、いす何とて拙者へ雑兵なみに爲を仰らる、はかりながら諸軍勢の司を承れば、戰場にのぞんでは君命をさかす皆將よりいづ敵にのぞんて戦を決す二心ある事なし、主従互ひに疑いあつては大事をなす事有べからず、このもしからぬ人を頼みて死力を盡さん事は、河豚のの毒にあたつて死するがごとし、阿蘇の御敵、男友次郎といふ似せものをこしらへ某を欺給ひ、別心なきといふや、されまじ善にもせよ、惡にもせよ、かくのまれし上は心力をつくし、貫公の思召たつ大望成就あるやうに案をねり、肺肝を碎て御爲に成いやうにいたし申さんと存つめてとる某に、御心の底を打割て御聞られぬたのも、まの所を見極めれいと、な中請ると、面色かへて申ければ、むすれば、友次郎といふものは、こしらへものといふ事を何ものを耳打しによつての腹立と見へたり、是には段々櫛子有心をまつめて一通りを聞てたべとめいやくさうに云ければ、いや、さ人のや事を聞こみ、立腹仕るやうなる郷右衛門にていひはすの似せものめとも、播州の生れにて二親に不孝にして、妹共をけいせいやへ賣人望に背きたるよこしまものさやうの不實成者をかゝる大義の企の大將、拵置るゝは雪を以て人形を作りもへる火へむかふに同じく、たちまち大事他へ洩て身を失ひ給はん、笑止さ

よといへば扱ひきやつが出所迄を知ての上こかくすと思ふて立腹の段至極せり何をか今い
つしまん我此阿蘇の家を押領せんと思ひ立事年久しく時節をうかひひる所に幸と若ど
の友成勘氣是わが年來の大望成就すべき時節到来と思ひ立家中其外貨殿のやうなる名ある
浪人をまねきあつむるにも我隠謀を企るといは、臣として主君を弑し國をうばふ叛逆に
誰か與してまたがはんやと思慮をめぐらしさい日いと都に妾腹の想領友次郎といふ人ある
よし是家の嫡男なれば庶子に察をつがるゝ事を無念に思ひ某をかたらし謀叛をたこさるゝ
といこゝ尤と同じて味方にまたがふものにはくわらんと思案して友次郎に仕立るもの大抵
の者にては成まじきと思ふ所を熊坂長九郎といふ大盗人の大將武藝に達し力量人にこへ肝
のふとき事山がくづれ來ても動せぬ大丈夫なる者と聞しゆへに招きよせ友次郎と成て首尾
能仕れふせ本懐達せば一廉知行をあたへんとすかし友次郎と立て置しゆへに家中を初め諸
浪人おほくまたがひつきて近日軍をもよほしても軍勢には事かゝらず是それかしが智略本意
を達し國を手に入ると外の人にはいわぬ事似せ友次郎の長九郎めと指殺して捨る思案此密
事を打明てかたらんと思ふ間も無貴殿にふしんせられうたがはれぬる所千方めいしく此存
念なればいよく煎ど小聲にてゆければ郷右衛門納得したる跡にて是は至極の御計客さや

うに似せ嚙を拵られ友次郎といふ餅の形なくせばならぬ道理まかま愛に一つの難儀あり
軍打勝ていても承けへば此御家おの高砂の神作の面を系圖として是を以て繼目の参内なく
ては阿蘇の家督つぐ事ならぬと兼てより聞及ゆへば先軍の事はさしをかれ此寶物を盗出す
御思案第一とせせばそれと我等もぬかりなく友成家出をせられし刺責殿へしのびものと
入て盗出し友成持て出られしといひせしによつて親殿猶々立腹有て是に愛憐の心さめなが
く勘當せられ跡目なきによつて花園姫を息女分に向へられ貴族の公達を御に取て家をたて
んどの思召人にて則此下屋敷に姫君を移し入置れぬ寶物の事は普代の家老朝熊左衛門の尉
に随分と尋ね出せとの御意にて晝夜 寶の面の在所を尋るに氣をなやませり寶と身が手に
有然れば何時繼目の参内せよ共謀なれば其段はちつとも氣づかひめさるゝなどまづのぼに入
て話しければ郷右衛門かぶりをよりいやもう貴公の其手ものゝかりながらくい中さぬ又友
次郎の似せもの同事に贖物の面ぬすみ置しと我々共に安堵させられんこれも計略いかに
くもいふべき且と安心めさるゝ爲に寶物をねがませ假んど次へ立ていづくにかくし隠たり
けん驚くしてまぬりに高時繪きたる箱を相手まはいる侍四人つれて出日本に又どなき寶の

面拜見おれと箱より尉と姓の面を出せば郷右衛門兩面を取て出したとき拜見する中に大膳侍共に向ひ申付し銃炮と云ければ四人の侍畏て種が嶋をかまへ郷右衛門をねらへば大きに驚ろき是は何ゆへ銃炮をかまへさせらるゝやとふしんなしてどがめればいやく氣づかひめさるゝな此寶物なくて何万騎の軍兵を拵てもやくに立す其方意内もはやまれて安塔のまてゐるといへ共今にてなほみなく焼てたもへなどいへば万一拜見するふりにて取てこしられてはどよりや身が用心ばかりかまへて氣づかひめさるゝな何と神作程有て見事成物にあらすやといへば郷右衛門件の面を取て是をまてやらんた是まで何はさ心をつくせしかまらず今武運にかなひ手に入し事のうれしやといたゞけば大膳大きに化轉して侍共銃砲はなしてうつてとれと下知すれば種が嶋を持し侍共ふりかいつて大膳が方へ筒さそをかまへ汝を一打にと四人共に一所にかまへければ大きに肝をつぶしやれ火ふたきつてくれな扱はうぬらは郷右衛門にかたられ主に敵する心底かとはがみをなせ共せふ事なし時に郷右衛門からくと打笑ひをのれも見事主に敵對するかと家來をばらむたかしさよさほご主に敵對するは非道なりとしらば三代相傳の主君を打て家國を押願せんとはたくしをやい馬鹿先身を何者と思ふ某こそ友方公の妾腹阿蘇の家の惣領まがいのなり正眞の友次郎也

成人にまたがひ父のなき事とふしんに思ひ母に尋れば汝が父は阿蘇の城主友方と申大名の嫡男に生れながら果報つたなく妾腹といやし突られ國へさへ入られす汝をつれて何方へも嫁入せよと金子千兩餘はりぬれ共他へ嫁しては其方繼父の筋目をつぎて阿蘇の嫡男といふ大名の胤失るが悲しさに後家を立て養育するとの物談を聞て母の筋いやしければとて的傳友方の胤あその惣領として大男に家をつがるゝ事無念骨すいに通りをのれやれ阿蘇の家をのつとり我友方の跡めにたしんと思ひこみ幼稚の時武藝を警古し鍛鍊の上猶兵術を見が、ん爲諸國を武者修行して播州にてと男伊達中間へ迄はいり晝夜武藝に心力を盡せ共人をかたらふべきも金銀なくては成がたく幸と弟の友成がどられし二百兩を熊坂めか取もどし俄の紛別かいつて其二百兩を以て二心なきものを見たてゝかたらひをのれが諸浪人をかかへるといふ事を聞しゆへにさいわいにして浪人ものといわせ是成四人も皆某が味かたの者共何と身が計略を見ていたる今首切て獄門にもかけるやつなれ共只今ゆるまてとくは我ふかひ思ひ入有ての事命はたすける其かとりは大小衣服をぬいで早々國を立去べしとやといひ侍共銃炮となせと下知すればあはしうた侍衆氣としかに銃炮となすまい成程大小きる物もぬいで参らうと下着一ツに成て出ればをいそれがをのれに似やうた侍共國境まで

鐵炮にてとくれといひつれば承るべき種が島をかまへばにづいて大膳を送り行こそこしちよま扱園の板敷上事件の似せものを引出し積悪の罪思ひ知れど首打落し直に下層敷をのつとり一味徒黨の輩を招きまづからあその友則と名乗り用心さびまくまもらせむるぞふてきなり

第十一 眞の女郎心を琢く種となる欠落

蟻螂蟬をうかへば野鳥蟻螂をうかがふといふ莊子が賦せしたとへのごとく大膳が押領せんと年來ばかりし家國を友次郎押取て一家中をなびけ親殿友方公を別所に移し門戸をとどさせ氣をつけ出入人を吟味してさびしく警固させけるがさすがげんさいの父なれば不孝の罪をやれそれけん萬に心を付ていたはりやせと御そばに是迄めしつかはれし人々を指置何かに不自由ならざるやうに馳走人を付てまかなはせける普代の家來友次郎が猛威に恐れ皆く從ひける中に朝熊左衛門尉正春は妻子を引つれ夜に紛れ國を立退隣國肥前の國松浦の里の賤が家をかかりわびしくらしたりけり正春が女房巻絹が親龍尾川隣左衛門は友次郎に從ひ然も出頭して時めき近き頃は加増を得以前より各別に威つよぐ万事國の政道を心のまゝに取行ひぬある時隣左衛門が太男驒太郎と松浦の里へ遣し朝熊左衛門にいわれぬへた

てとして國を立のさ不自由成くらしをせんよりは降参して今の殿につかへ先知を領して聖手を安樂にすこそすが勝之彼屈原が獨なを醒たると片意地ばつて湘江に沈み果何の益かある是皆世界の無分別もの心を改め降参して御奉公をや所存ならば御前の所は宜しく取なし申上ん返屈をやめて早々歸参有べし其爲に悴をつかりと父が申付し口上の通りを述べれば正春むつとせしむねをれさへ眞殿の聲と思召て日さくくと貴公を指こされ深切成口上満足に存れ共世間をやめ侍形氣を取をさ百性百前に成くだり朝夕身を自由に持し故御主取して大小を指上下を着いんざんづきあひいやに成ひへば先歸参の事は御せむに思召下されぬやうによろしう申てくれらるべし然し我こそ此佗住をふるまふ樂とぬれ共女共とよしな偏用者に添ひて苦勞する親兄弟之今時めきて榮花の盛とうら山しう存るもまらず若さやうにも思ひなばさい日其身参られし事なれば女房が心底を聞て親兄弟と共に富貴の身とならんとやさば此度つれて歸て給これ其方爲みは姉の事かやうの見ぐるしい躰にしてはさぞ殿には不同心にてあるべしといへば成ほや御察しの通姉巻絹と私ならで只一人より外なき子共姉とを今は萬に付てふ自由にあらふと取分母が心苦勞に仕り此度歸参の心底なきに極りなば断ちて姉には隙をやつて下されと願ふて見よとひそかに申付ていへば姉はへ

歸らふと申されれば御暇を下さるやうに願ひ申といひければ、自由の夫を見捨富貴の親の元へ歸たいと存るつめたい心の女房にそふてゐては頼もしからず成ほやいとまごどらすべし姉が意内を聞給へといへば麟太郎次の間へ立巻絹おひ右の様子をうらやみければ主のうつくしうひまさへくれられふ事ならばさいさいお子はなしいかにも歸たいとの望と一段の思召と朝熊にあひて姉の存入を承いへば國を立退せられてより病身になり手鍋さげ辛勞成がたければ尼おも成て心安く親元の世話に成てくらしたさとの願ひ御了簡有て此度いとまを遣はされ下されば國へつれて歸たふさふらふと少はいひにくさ跡にて申ければ、それこそ思入の通り仕任たるこそよけれと硯引よせ三くだり半書で弟麟太郎に渡し我等宿にのたらは女共が歸にくからん近邊へ罷出申すれば跡にてあれが残りし物を取あつめてつれて歸て給はれといひ拾にして出て行ば、レヤレ案じたるとは格別氣さんじ成男と巻絹にも其通りいひていとまの状を渡せば親里へ歸るがうれしさに年をかさねてなじきたる男に一生の別なれと涙もこぼさず賣残りの古長持一ツ星を持て歸たしといへばつれたる下人共に取もたせ姉は辻かごに打のせ半季居の奉公人が出かひり時に出るのくつたくなむは宿を出て行けり誠は昔より七の手はなす共女に心ゆるすなどは密男平の事にあらずね

こそこのころを飼つけものはなぞ見し猫犬を外へやるにさへ名種をたしめさうとは貧家の夫を見捨てよふも歸りし女かなど在所は一所どころとていひたてけるも、断ぞかしあのやうな水くさ根性な女にはくつたくなしにさつはりと際やられたがましと男をなめしがさつはりとついで隙やりしこそ道理なれ監人の晝ねもあてか有て女房をいなせし其夜から始の内儀も見増ほどの器量な女内へ入てもつまじきあいさつとかく生ものにはおだんならず見た所は堅い浪人成がか糸てから拵置た妾で有べし此跡を見てからは始の女房が心残さず風がるにいなれたも此妾の事知てぬられしゆへにてあらんさすればはなれし内儀が尤と向となりのかし其評判するも尤也夜に入て世間もまづまりし時分から夫婦のあいさつかはりて両方共にいんぎんなる言葉づかひ朝熊左衛門女に向ひ若に私の此中こなた様を以て申入た儀を何と仰られてござるといへばされば友成様の仰には今迄の一途に親兄の禮を思ひ兄貴に跡を進せんどのみ思ひしが正春の言葉に親と兄とはいづれがたもく大切に思召どの其方への申かた至極せり親殿をたしめて家とくをうばひとつて世をたてんどの所存の人望にそむくふるまひ兄を討て親の命を助るが孝の第一成ほせ貴殿の存立の通り兄友次郎が近々ござめの參内に上京するよし道に待うけ討てとらん彌々以て其むたく致さるべし

どの御事と申せば、悦ばしう存る然し先何分計略を以て大殿様を盗出し其上にて友次郎殿を討とらずに我々心を合せねらふと聞れたらば大殿様を早速に害せられんもはかりがたし私御國を立退て民家にかくあらして住居仕るも友次郎殿に敵對する心底なき様子を見せんための謀なり今日女房共にいとまをやつて里元へ返したるは眞鱗左衛門が心の底を探り見させん爲にて有今鱗左衛門が回頭して威をふるふ様子實に欲心から友次郎に追従して御意に入や但し大殿を盗出さん計略にすいぶん取入勤仕るや我に降参せよと度く申こす心底親殿をうばひ取與方にまねくや更に此善惡見分がたし女共より近日通路あるべければ此一左右を承ての上御隠家へ伺公仕べしと仰上られ下されといへば成程左様に申へまど夜明ければすぐにいとまをいして友成公のかくれがへ歸りけり大望のなりにくきひどり打つゝみが瀧といふ所の麓に身をかくしてればする友成の友とせらるゝ人への花前ひとり夫さへ朝熊かたへ使につかはされていと物さびしき夕ぐれに柴の戸をたたくものあり花前が歸りまやと立出て戸をひらき見給へば丸綿にて顔をつつみま風俗のじやれた女そこつながら御尋申度事あり此邊にちかい頃のらごさつてござる浪人しめは御存なきかと尋るこわいろごふやら聞たやうなとくれに及べばまかく顔も見へねど多じていひやりし心算も

あれば若さふは新町につとめてゐる山吹ではないかどおれば是はしたり友成様か縁どて愛でたづねあたりましたと悦ばさあくまづ内へはいられよと伴ひ入ていつぞや難波へゆく人ありしやへわれらが此かくれ家を出てやりまが夫でくるわを欠落して來られしか其我書し多なき跡に残まては置れざりしかと問給へばさらくくる目とぬけても走りても参りは致しませぬ聞なされませたまへの御咄の兄と様友次郎様の今は此國をね取なされ御榮耀の余りに私事を聞及んだとはるくの肥後から侍に仰付られ私を請に遣はされ見もなされぬ私を五百兩にて此度請出し給ひ乗物にのせて侍がついてお國へつれてござる所を今一宿にて御國の屋形へ着どのうはさを聞て其夜とねすに宿屋のうらよりぬけて晝は寺社の縁の下又は森林の中にかくれよるく道をとづねて漸此里へ來てたまへに思はずも尋ねあたりましたと段々どかたればでかしたく花前もそく才にて四五里さへ使ひやりて大かたの明日歸るべし先今宵はゆるりとくたびれさせられすば夜と共に話さふと枕二ツに夜着一ツ日ひねの床のたのしみゆつくり三十年の壽命とのびさふなものぞかし

第拾二 先案じても御覽せよ主を畜生にしてよい物か

次第に御意に入て知行を取上るはひとへに瀧をのぼる鯉ふひとしき龍尾川鱗左衛門が今の

繁昌以前に十双倍伽羅くさい女中の艶なるをまたかへ友次郎殿を度々請招申て色を以
 て取入ぬ難波の色里に戀のある女郎名を指て御指圖夫こそ安き御望此女つりよせ是一種に
 て響應仕らんと日を定て私宅へ御成眞加にかなふて有かたいと門外迄むかひに罷出す
 ぐに座敷へ御入扱今日難波からの珍物今日晝前後には着仕る善先夫迄は有合せの女どもに
 て籠酒召上らるべしと善つくし美つくして様々もてなし申ける友次郎數盃かたふけられ扱
 約束の難波女はさふじやくと御待かね是程おそい夕アにも着る筈日和のよ
 し舟通滞とも思はれずと亭主隣左工門手に汗にぎりあせりある所へ請に行たる家來武佐田
 額右衛門あき乗物を持せかへり武運につきたる仕合夜前の泊りにゆだんいたし少の内ねる
 りし所に仰付られの身請の大夫山吹旅館の裏の垣を破り欠落仕りゆへ追くに追手かけ
 り得共得とらへ申さず申上べきやうもこれなき仕合すぐに切腹と刀を腹へ當申ゆへさも此
 不調法のわけをも申上ず私の儘に切腹も恐れ入無念ながらから乗物をか、せ罷歸ゆかや
 う共曲事に仰付らるべしと覺悟をさへ先申ければ隣左衛門肝をつぶし不調法の仕損じのど
 いふは大抵の事かゝる不届言語道断せよばいの仕やうもなきうろたへもの侍共さやつに纏
 をかけと早速にいましめられ先長屋へ入置べしと以ての外腹立して此旨屋敷へ罷出て申け

れば友次郎甚だ不興し肝心の遊興のものと失ひ何を以てうかくと晩迄是に長居せん供ふ
 れいたせと散々の氣色にて座敷を蹴立ぬばかりにして歸館有こそ笑止なれ隣左衛門出とな
 をつき今日迄仕損じなく出頭せま某家來額右工門めが不届によつて御機げんを損せし事こ
 そ安からぬそれ額右工門引出せ手打にして捨べきぞと新身の刀に切づかはめ押の内へ引出
 させうぬめいさかばりつけにもするやつなれ共久まき召仕ひたる舊功にめんし身が手にか
 けるありがたいと存べしと刀を抜てふり上る所へ娘の巻絹走來りやがて額右衛門か後にね
 はひかすり此者の命はわらい申請する是非ゆゆるま下さるべし夫共共聞入なく御手にか
 けられいこむらはどもに命めさるべしと刀も恐れず額右衛門が命をかばひかきさな
 り邪摩なせば隣左衛門ふり上し刀をひかへ不届の様子と定て聞てゐるべきが何故あさやつ
 が命をかばひ手にかけなば共に死ななればたらく近比下人共が見る前も見くるし見りや隣
 は取ぬれ共きのふけふ迄に國の家老朝熊左衛門が妻室身にかへて此額右衛門が身をかばふ
 は扱ひ以前から密通にても致しをり不義いたづらからいとふよなすれば彌々たすけられ
 ぬ奴をのれとてものがればわらじとはつたとぬめれば巻絹涙をながし額右衛門が命をかば
 ふ子細はたとへ火水の費にあふ共いふまじと存じぬれ共密通せも懸幕の心かゝ身を捨ても

たすけたさやうみ父上み見下されたる所女の身の何にもかへかたき第一の難儀是によつて
 様子を顯し申し此度難波の色町の山吹と申女郎は若殿友成様の御身上にかへらる、程に深
 うに迷ひ成ぬたる太夫夫を名ざし他人でも有事か兄の御身にて戀に成れ此度の馳走には山
 吹を請出し酌に出せと仰付られ有ばとて御請を成れ過分の金銀を持せむとて請ひ遣はさ
 る、由聞に依て額右衛門難波へ下る迎暇乞に我部屋へ見へし故其方を頼む身請きてそなた
 の油断の跡にて若殿友成様の方へたどして遣はされぬとて父上は當殿友次郎様の御き嫌に入
 事已を思召て世の人口又は主人を畜生に成るも御氣付す御舍弟の不便をかけられ枕をかば
 されし女を兄との御慰に身請なされ枕にてもかばさたる時には主君を畜類に仕立らるゝ
 所が悲し其方主人の爲又はわらはが見込てたのむ所を思ひやつてそちか命をみつからにく
 れたと思ひゆだんにてとりあがしたる分にして友成様方へたどしてたもれと頼みし故成程
 畏入の儘に斬罪にあふ仕損じなれ共御主人の悪名を世上に出さぬと臣下の忠義にかにも
 辨引にあひいとも悔む事更にあるまじと覺悟をさしめ命を捨ての不調法かゝる大事を頼み
 ながらさらるゝを見てゐられぬか主君を畜生になされて忠臣といわれぬかと地空をたゞい
 て泣くやけは額右衛門今迄いかりし血縁を成目の中よりろろくと涙をこぼしてでかした

忠義を思ふ臣下の心と大身小身にかゝらずいひ合さぬ共一致なり我も事成就仕課せる
 迄は心にこめて口外せぬ合点なれども娘お頼れ主のために無調法者の名をとりまばり首を
 討るゝもいといず請出したる女をわざと取にかし友成公の方へ落せしはあつこれ比類なき
 忠臣父が悪名を悲しみ家來を頼み其上今いのちを助んために劔もふそれず家來が命をかば
 ふ娘が孝心其心からと當殿御家を押領なされてより以來ついでしやうけいこくを以て取入加
 増を得て出頭がはして威をふるふ某を人のやうに思ふまじそちが夫朝熊は極眞をたてて二
 君につかへぬ所存あて御國を退散しむとわびすみして表向武士をやめるやうに見せかけ
 る、若殿友成公とはだを合せ友次郎殿をはらばし御家相續せんとの計略と推量はしてけれ
 ども近比それはちうぎのみにくいられたためならず其故は今軍勢をもよほし此れ國へよ
 せかくるがさいと大殿友方公の御命あふなし去によつて我と是のこに心をつくし友次郎殿
 に取入輕薄を盡し色方仕込首尾を伺ひ大殿を盗出し夫から表へ顯して友次郎殿へ敵對する
 所存今何を思ふても大殿と云身を握られ此方共いやたけお思ふても鞘を持ってゐる身なれば
 急うに事は成難しそちを縁切朝熊を取もせしと友次郎殿に朝熊左衛門共一家の因をいた
 ると安堵させ申さん爲の二ツの計略又此度御舍弟の不便がらせ給ふ女郎をこのまゝとてそ

重寶此女を引取自分のなぐさみにそなゆれば其方達がいふとそり弟の妾を兄のなぐさみ物にするも畜生同前の非義非道の大將と従ひつさしもの共にあいそをつかさせよりく味方へ引人んためのこれも計策かく心底をあらはすからは巻絹には人しれず朝熊方へこのひゆき我計略のにもむきをいひ聞せ卒忽に此國へ取かけれぬやうにどくと此むねいひ聞せよそちばかりにては道のあいだもればつかなし額右衛門供して夜に紛れて出て行ど今迄悪ど見へし鱗左衛門が心の底を打ふるふて語りければ巻絹は悦ひわらひどても眞實は夫と申合せわさとさられどかへりしは御心の底を善か悪かうかひ申さん爲にてありと父子主従ひふ心のうちをあらひながせしごとくつしまずかたり其夜ふけ過て巻絹は額右衛門をつれて天をしたふてしやんくと袖をひれふる松浦の里へどいそぎけり

第十三

實様々の舞姫の姿を見まゐる大將の眼力

威有て道なきものいかならず喪どかや友次郎及則猛威さかんにして家中の諸士はいふに及ばず一國の人民たぢれそるゝに従ひて希有の驕をさめぬ美をつくしたる別館を新に立られ極彩色の金の間へ寶母御簾尼を都よりむかひ入多くの女房たちを付置れ琴三味線に達せし醫女舞の上手風流なる少女を都より招き晝夜の遊樂喜見城のたのしみもかくやあらんと見

聞する人感に絶ぬ父をたしこめ弟を國へ入られぬ大惡無道の生れ付に似やいざる實母への孝行つさくくの女郎も感するばかりの孝心母儀歎悦のあまりに我子を一城一國の主になしいつか國主の母公と尊敬せられんあはれ一生の中に一日成とも國の守の母とあふがれて往生またやと願ひしに我念願届き友次郎といふ子を持しむげによつてかゝる榮花の身と成て人々あかしづかれ晝夜のたのしみ極樂とてもかくはあらじ今死してもはや此世に思ひをく事なしそなたは大舜にも増りし孝子かな幼少より寢食を忘れて養育またる甲斐ありと友次郎を拜し悦ばれければもつたいなき御事母のれかげによつて今日かくの如くの大神と罷成一國を掌握して榮耀身にあまり何に不足なき身と成しは皆以て是迄御養育の御影有がたき仕合胎中の御身の苦まみより幼稚の間の御恩を思へば何を以て報すべきたゞ一日も御堅固にて若き時の御苦勞を取かへさるゝやうに何にても御心になふ御恩をなさるべしと母このもつまじき跡を見てはいの成ものも我を折かゝる孝心からは父友方公を押さるゝる、は心得ぬ事かなとふまを成ぬものななきけふは何をがな御恩に御めにかけんどがへをかれし患者共を召て尋ねらるゝ所へ表番の侍御前にかまこまつて只今御門前へ伊勢より参たるよしにて大神樂と申もの獅子頭太鼓つゝみ笛をふさならま神子巫と見へて



大勢風流なる出立にて罷越諸國を神いさめにまはり其一國の殿様へ推参いたし大神樂を
 まはし御祝儀を申ふさめ其上にて御配の御領分をまはり得ば御屋形にて御祝儀の大
 神樂をまはしたきよしねがひ申しいか仕つるべきやと伺ひければ友次郎聞給ひ誠に頃日
 諸國をめぐると聞當國へも來らば召よせ母人の御慰に御めにかげんと思ひしが幸ひく
 早々書院前へまはをへまとい付られ母公をいざなひ書院へ見物に出られける神子と見へし
 の十八ばかり一様に金銀の花笠を着緋縮緬に様々のぬい付もやうひろ袖に鈴を付金箔にて
 だみたるさくらを持いつれも器量すぐれし女共一つに並むたり神樂男のふはどりかぶど
 の天狗の面をかけて金襴の装束に太刀をはき金の小太鼓を以て十人烏帽子に直垂を着しつ
 つい太鼓さしらを交へ拍子を取てあざりける其れもしろさ心も詞も及ばれず獅子の乱曲
 田樂法師の姿をせし輕き小坊主あやを取品玉を取鍊磨人間の口と見へず古今の名
 人と母儀を初め多くの女中は是は終に見ざる見物ものと感聲を出し覺へずとやめはけり
 友次郎も詠入てゐられけるか一切神樂の曲すみて中入に酒食を出され休息せば今一度獅子
 の乱曲太鼓の曲を見るべし其間に三番めにゐたる神子小盃さすべし是へ召つれ來れとあれ

ば伊勢神樂の神子のならいにて大神樂をつとめ中内の男と盃を仕れば不淨に立申ゆへかた
 ぶ慎と申し御國中をまはり神樂役仕舞ひ上にて推参仕り御盃を頂戴いたさん先今日と御ゆ
 るし下さるへまも禰宜御断に参て申ければ友次郎からくど笑ひコリヤ糟禰宜子細な事を
 以てすども播州室の花前神子に早く來れ延引せば食ふ成まひと申せと眼を見出しねえつけ
 ていわれければ此禰宜びつくりして次へ行かくと云へば其中に天狗もてかけたる男身が
 それへ行直に断をいふべしとゆかんとせらるるを花前山吹袖にすがり今來まへあれへ
 出なさるは虎の口へ餌を持って向いせ給ふにひとしくどりこにならせ給ふいふれた事これ
 朝熊さんとめまして下さんせと兩人共に袂をひかへてとむれば朝熊左衛門天狗の面
 を取て花前と見て名を指てよばるゝからの我々迄姿をかへて入こみしとはにらんでゐらる
 べし此次の乱柏子のうちに手ごめにせんと思ひしに何として花前とは見あらしされたる事
 やと正春ふしんをなせば友次郎様くはんねら門兵衛と申せし時は毎日くる日へ御出成れ心
 安く致しまして然もくる日をかけ落せし時身にかへて追手をれいかへされ道迄をくつて下
 されし程の事なればこのやうにすがたをかへても見知てござる等といへばエ、さやうの事
 をとくに仰聞さるれば又さふどれ顔のかくしやうもあつたもの皆いよもや御存あらじと女

中の事とそんじられた顔をあらはにさせて入こみけつく先手を敵にせられ身用心させますだけ
 が此方の存入とちがひぬれ共先是迄心を合せ入こんだ上の念力で成共思ふやうにせずには
 をくまじ友成様面をばづして尋常あつ越成れ私に供について参るからと百万の軍勢が跡ぞ
 なへあひかへると慥に思召て隠せず御出なさるべしといへばチ、何しに隠すべき只親殿
 の御身の上を案じてこそ猶豫すれ宿にていひ合せし通たどへ我は友次郎殿にくみまかれ
 やうく見ゆる共見捨て只大殿の御はする所を尋ねて一當に押入御別條なくのけましてくれ
 られよと有ればハテ其殿は是にぬる一味の衆中皆合点の事にてい得ば少も御氣づかひ成
 れまじと一味の人らにも右の通り再往いひ聞せ友成の供をして只二人友次郎の前に行そば
 ちかく畏て友成のたまひけるは以前いくわんねら門兵衛といふ男伊達とばかり存兄上と
 申事をしらする故に不禮の段御免をかうなりいへし私の心底はいつぞや新宅の下屋敷にて
 申せし如く兄有ながら弟の身にて家をつぐ事本意ならずとわさと不行跡ものに成てもつた
 いなくも此やの勘氣を願申程の所存今以て其心底にちがひとなく家國はこなたへもつり私
 は曾て以て世をたてぬ心案に極め居申せ共父友方を押こめ置る、様子を聞いかに兄上を大
 切に存る身にて父上とは思ひかへがたま夫に御座あるは定て身身の母を様にて渡らせ給

はん腹こそそのね私の爲にも母父友方とは多夫婦ならずや夫を押こめ其身の榮花をさきはめ
 給ふは貞女の道にあらざ母とばかりに孝をつくされ父に不孝にわたられては至孝の人と
 は申されまじ御實母同事お父上へも孝行をつくされなば我今爰にて生害をどげ御子孫迄も
 此家を御氣づかひなく相續なさるゝ御安心の爲に此世を去て家國を進上仕る心底なり片時
 も早く父上の御心のほどけいやうに御隠居屋敷へ移し申されは孝行をつくし給へ若し違背
 有て其儘父を押籠置るゝ所存にていと親兄の禮は是迄兄とといひせず刃むかふ心底に
 ていがかさお御返答はいかに承らんとつめかくれば朝熊もすしみ出今若殿の仰らるゝ通親殿
 を早く我らへ渡されは國御家を直に大殿をゆづりを請られ仁心を以て國を治先給ひ御兩
 親様へわけへたでなく孝行をつくされ御舍弟友成公へ御國を二ツに割て又御まへより御ゆ
 づりあれば御親子御兄弟御別心なく家中の輩に申に及ばず民百姓迄万歳をとなへ御家長
 久と祝しやさん万一いなと仰られると此朝熊がはかりながら存分に仕るは思案さためて
 返答われもつめかけていひければ爰を肝心要の場と神樂の役人と姿をかへて入こみし者共
 は皆相傳の家臣たち禰宜神主の跡を取直肌には着ごみを着するもあり鎖帷子を着たるもの
 も有て面々大小ばつこまゝ鉢巻し廿余人書院ささに並んですじとみい切入らん氣色に

てひかへるこそいさましけれ

第拾四

能々さけば有がたや眞と母に孝行な子

山がくづれ大海が引くりかへつてもちつ共働せぬ友次郎廿余人の者共が命を捨て入こみし
 めきほひを見て髻打なでコリヤ朝熊左衛門我には染々あひさるが阿蘇の家の代々の執權職
 とて高知を取一國の政道をも執行ふ智恵者どさししがさりと見ると聞どにて大き成無分
 別ものかなたどへ鑛石にてかためたる勇士共にもせよ廿人や卅人をかたらひ此屋かたに
 ふした用心要害があらふやらえらずに國の根つぎの友成を同心して何の方便もなく來ると
 正眞の夏の虫の火に向ふが如く一人も殘らず目滅せん某が用心の程を見てをけと腰にさ
 げられたる鹿笛を取てふかれければ爰の隈かしの透より鎧武者弓鑛炮鎗刀さまぐの道
 具を持て十八廿人あらはれ出弓鑛炮をかまへ人々をねらひぬればいさみにいさむ人々も飛
 道具にてまりとてあされぬるより外はなし友次郎打笑身が詞をかくる迄は弓鑛炮をひなす
 事なかれと下知せられなんと家老の朝熊殿やたけに思はれても身うごさせられれば火ふた切
 て二ツ玉が胴ばらへたちまち御見舞やす同じ臣下にても汝が眞の隣左衛門の思慮ふかいし
 れもの我此國を押領してから面を付かへ身がふひげのちりを取鹿を馬とのついでやうと皆

是本心より實に阿事あわらず某親殿を人質回前にをしこめ置申ゆへに身に對して荒氣を出
 すと大殿の爲にならねば随分と某に取入透を見て親殿をうばはんとの下心近比ふかい分別
 ものそれに引かへ我にさかふて國を立退侍やめて百姓あなる見せかけ夫で身がゆたんせふ
 や家老ともいはる、身がふがいなくも國を取れすとく立のくさへるに此節俄に侍や
 めて百姓にならふ道理なし此緩急のはかりことさやうのちよろい斗略をくうやうな友次郎
 と見たまなご故に大神樂にすがたをかへて入こみれもしろがる所をしてやらふなごくと近
 比く淺ちち去によつて却て今身が爲に囚籠に成しにはあらずやコレ友成そなたの正路
 なる心底は室のわけやにて物蔭から朝熊に語られしを聞てからさりとて兄弟思ひといはふ
 か義を立る心さしの深い舍弟と感じ人野心をやめてそちが妾の花前をつれてあををしたひ
 追刺にあふての難儀をすくひ其歸りにそなたが盜賊にとくれられぬ貳百兩を取かへしぬれ
 共此金を以て性根を見すへた浪人あらばか、へて大膳が方へつかはしきやつが逆心をさぐ
 りしらん爲ことばりもなく貳百兩かり取にしたひ此仕舞は共方爲に成事と了簡して中取し
 め其後郷右衛門と名をかへ浪人ものに成て大膳にか、へられ似せ友次郎が手にか、つてそ
 なた花前はすでに害せらる、所をたすけその時兄といふ事を名のりたふ思ひしか共肝心の

寶物高砂の面の見へぬをまらんが爲に名のらす兩人共にわざと屋かたを立のかせ心案をもつて家國を押領した身が一通りの心底を只今あらとしかがすべしのならずそち遠がひ合て入こみしいきはひに恐れ白狀なするとは思はるゝな今身が飛道具をはなせとことばをかすれば即座にかたぐは皆ごろしにすれ共元より我此國を押領する所存にわらず成は以前は惣領の我を捨て次男に家をつがさるゝと母もろ共に無念にねもひ有やうは男伊達中間へ入てゐたりし時分其方室にあそびあはるゝといふ事を聞て一討にしてとわけやの庭へ忍び入木陰にかくれてそなたが我にゆづりたゞと思はるゝ心から勘當がうけたゞとある段々の心ていを聞て我心にて心はづかしく其時金を打て家國の望をやめぬれ共一度國を取て母を國の守の母公と尊敬させねばならぬわけあり此所を聞て身が押領せし心底を邪と思ふて給ひるな我都にて出生三才の時親殿が國の見だゞと深き生れつさなれば國へとてはむかへがたし何方へも其子をつれ縁につけよと梓料として金子千兩親殿が下されしを是にのらるゝ母の涙をこぼしみづから千兩を持てよめいりせば一生安樂成家へ行思ふ事なくくらすべさか我子とたれあらふ肥後の國阿蘇の家の惣領嫡々に紛れなしやわらと外へ縁につきて又こと男を持なばつれて行し子は後づれの夫の子と成繼父の家名をのらん

さすれば一國一城の嫡男と生れ出たる甲斐もなく名もなき平人の子に成て一生はつるが不便なりとていまだわか母の後家同前に身をたて千兩のかねを以て某七八歳の時分から手習讀書第一は兵法劍術の師をえらとて世に聞へたる軍略に達せし師範につけて誓古させくれられ十四五才に成し時汝が父は阿蘇の城主友方といへり其家の長男として次男の家とくをつがれ無念おこなきか幼少く武藝をけいこさせしは身のなぐさみにはをこへさせず勇猛の武士をかたらひ謀叛をねこし阿蘇の城をつとり我を國主の母とあまねく國中のものにあふがせふと思ふ所存のなきかふがいなきや我若くしてやもめと成れもしろからぬ世にながらへるは汝を一度あその家の惣領と國人にもえらせ我子のいせいが見たさに兵法けいこの時は女の身にてうけだちの相手と成武藝鍛錬させん事を思ふこむはん叛逆をくだてさせんためばかりなるに朝夕我をばげませ給ふゆへに尤某も口惜之存れ共謀叛をねこせば父に對して弓を引罪科のがれず天の照覽も恐れ有とことわり申せば汝を産落してのやうに成人せしどとふみにてさへとはせ給はぬ父親に弓引事はもつたいたなくはひどりがかんなんをへてそたてあげたる母の親のいふ事は籠略になしても其つみは恐ろしからぬか世間に父と母と二人してそたつるものなるに有かかいなき女のかやが手あもあはぬ

男子をそれ程迄に養育せし其恩よりと捨られた父の恩を思ふてむはんなれこそされぬよなよし。此上は母が死て父に弓ひけといふ罪をしらへの催促人なきやうにしてとらせん。余年うき苦勞してそだてし國をどらせあその家のかま標と諸家中のものも尊敬せられんと思ひしにふがいなき慥ゆへに賤きやもめと成て死行事のあさましやと刺刀菜刀さか手に持て死なん。とせられし事日に幾度といふがさりはなしいか標母の身にて無念に思召はことばり至極たとへ父み弓引大罰にて此身はいか成うさめにあふ共一旦母を國の守の母公といわせ申さんと夫より諸國を廻り二心なき浪人をかたらひ廻り自然の時の思ひ立に力合せ給はれと契約して置ぬ親殿の御事の押籠奉ると風聞させなばいかに仁心よかく義を立る其方なりとも親と我とと見かへたまはし然る時は我をうとむ所存出来國をもゆづる心止て我を打て父を助んどこかり給はん其時貴殿が手にかつてうたるれば此國とひとりそなたの繼といふ者此存念故に母に過分の榮花をさせ奉りしゆへに極樂といふ共是はさかぬるまじ最早浮世の思ひ出いせしを死でも此世に心は残らぬと満足がらる。一言を聞し上は御養育に預りしせめての恩送りをせしと思へば一世の本望大殿は新宅の御下屋敷に御機嫌にて御入則花園姫をふ守に付置ぬ割符を渡さん朝熊左衛門是を以て下屋敷の表門のけいこ

に渡さば別條なく内へ通し親どのに御對面さすべきと心の底を打明てかたり給へば友成朝熊其外の與力の人々迄感涙をなほし誠に無類の孝子やと始て我をぞれりにける

第十五

婚禮の壽 相生の松風颯々の聲を樂しむ

志合時は吳越も爛熳たり心に合さる時は骨肉も敵讎たり今迄心に劍をふくみし兄弟心底をわかしあひ始て心打どけてたがみに水魚の思ひをなし今迄誠の連枝の交り一家中共に万歳をとなへ悦びいさむぞ道理也大殿ます。下屋敷にゆ入有て只今朝熊左衛門の尉御迎のため参られたると聞より諸家中我さきにと追々に御むさひの上下引もさらす御下屋敷迄卅五町人絶なくいさみにいさんで御乗物の前後を守護し當御屋形へ入奉れば殘薫尼をはじり御兄弟立向ひ御手を引奥に請じ奉り御夫婦御父子の對面悦びなみだつきしなき積たがひの御物がたり諸士の御目みへにぎはひて上下さしめくばかりなりまばらく有て友次郎肩絹はねて兩肌をぬぎ給へば若切腹やど人々をどろき見る所に下に着せうれし白小袖の上に五條のけさを掛られ我此國を眞實押領する心にあらず一旦母を國守の母と尊敬させ一生の思出にさせ奉らん爲ばかりに大膽を追放し其勢ひに乗家國を押領ま母を向へてあらゆる榮耀をせ申上は我年來の願望今日すでにとげはたせり然る上の見ぢんも浮世

に望のぞなし元來もと兼かねてよりかくの如く出家しゆつげの覺悟かくごを極きまるれば則すなはち今友成ともなりへ家國けこくをゆづり大膽だいだんよりうばひかへしたる家の重寶ちゆうほう尉ゑうと焼やどの面おもてを渡わたす急いそぎこれを以もつて繼目つぎめの參内さんないをつとめられ家をたさめ父上ちちかみに孝行かうかうをつとさるべし且かつ又母事ははのことは別わかて我われに成なりかはり心を付つて給たまはれと寶たからの面おもてを友成ともなりにわたされもどゞりをし切き二念にげんなき絆友方かんしん感心かんしん大だいのたならず孝かうとほひ義ぎとほひあつはれ我子われこほぞ有ありたり〜此上こゝは辭退じたいに及およばず友成家ともなりけをたさむべし一家中いっかちゆうの聲こゑもいよく友成ともなりに忠勤ちゆうきんをつとすべし扱近せきぢん々吉日きちつをえらみ花園はなぞのいぬ姫ひめと婚禮こんれいの祝義しゆぎをとりむすばん用意よういいたせと仰付おほせられ御さげんよく入いらせ給たまへば上下じやうげ悦よろこびざゞ免ゆるげり友成ともなりかさねて山吹やまぶき花前はなまへの兩妾りやうせつを召まれ今日けふ親殿おんみいひなづけの花園はなぞのいぬ姫ひめと近ぢく祝言しゆげん有あべしとの仰付おほせられ違背ちゐはい申まて其方達たつたを其儘ままかゝへをけば兄上あにがみへ家をゆづらん爲ための方便ほうべんにわたさど色いろぐるひに身みをはめ勘氣かんきを請こんためどの是迄こゝの我等われらが申立まをたの心こゝろどちがひ色いろにたはれて不行跡ふぎやくのいひわけに作り賢人けんじんだてを申親まをちをたばかりし證據しやうこにはいひ名付なづの姫ひめと夫婦ふうふにならず兩人りやうにんの女ににはたされていどまをやらぬといはれては今迄いままことをたてし義ぎの道みち皆偽いつはりりと成なりて父上ちちかみへも家中いっかちゆうの諸士しよしへも立たがたし今生爪けいまづめをとなさるゝ程ほどに面おもてにいとまをやるはかなしけれ共今ともいふ通りなれば兩人りやうにん共に聞きわけ是こゝまでの縁ゆかりと思おもひ明あらさるゝ限かぎで給たまはるな則すなはち兩人りやうにんながら身みが妹いもうととなしてそれ

〜にゑんに付れば身みが詞ことばにまたがひ指圖さしずの方かたへ縁ゆかりについてくれられよと事を分わてまみ〜と仰おほければ二人ふたり共にまばしなき入いるたりしが何が扱あいづれの道みちにもれまへのに爲ためになる事ことにていはゞ御詞ごことばにそむき申まをまじとわれは友成ともなりかぎりなく悦よろこび給たまひ則すなはち龍尾川りゆうびがは鱒ます左門さもんをぬされ其方そのかた一ひと子こ鱒太郎ますたろういまだ妻女つまめなきよし身みが是迄こゝ情なさけをかけ心底こゝろのまことある女にゆへ此度こゝろ我われ妹分いもうとにして鱒太郎ますたろうがつかまつかはすべし嫁よめと思おもひて其方そのかたすいぶん不便ふべんをかけてくれられよと花前はなまへと眞まことどの契約けいやくの盃さかづきをさせらるれば鱒左衛門ますざゑもん身みにあまり添そき仕合しあ悴せめと冥加めいがあ叶あふ果報くわくわくもの吉日きちつを定め約束やくそくの盃さかづきして悦よろこび私宅しりたくへ歸かへりけり次に鱒左衛門ますざゑもんが家來けらい武佐田ぶさた額右衛門がくざゑもんをまねかれ主人しゆじん鱒左衛門ますざゑもんへことばり云いて向後かうご身みが近習きんじゆにゆしつかはらん然しかれば此度こゝろ一命いっめいにかへて山吹やまぶきを我方われがへ落おせし忠義ちゆうぎ詞ことばも盡つくされず此勸請けんじゆとして山吹やまぶきを汝なんぢが宿しゆくの妻つまに得えさするを召まつれて參まゐれと手てを取とりて直ただに下くださるれば額右衛門がくざゑもん夢ゆめの心地こゝろしてこは有難ありがたき仕合しあと山吹やまぶきを伴ともなひ己おれが宿所しゆくじよへ勇ゆうみてこそと連歸れんきりぬかくて友次郎ともじろう之領内のりやうないの山やまよせに一寺いっしやうを建立けんりつして友則とものりと云名いづなを直ただに寺号しやうごうとなし友則寺とものりじやうとなづけ給たまひもつはら禪法ぜんぽうをゑこなひ給たまふ寺院じやういん悉しつく出來きし入佛にらふつ供養くやうに近國きんこくの名僧めいそうを招請せうじやうあり大法事だふほふしを執行しゆぎやうある是こゝによつて友方ともかたをはじめ殘薰ざんくん尼友成にともなり公朝こうてう熊尾川くまびがはをはじめ一家中いっかちゆうの人々ひとら未明みめいより寺じに詰つめられける然しかる所ところへ雲川うんがは大膽だいだん同どう源藏げんざう惡あく

黨共をかりもよはし法事半に寺内へふんごみ友方友成藤中に御經を聽聞してればする所をよつと見すましばたくと切こむを朝熊左衛門心得たりとくんじゆの中ををしわけ走りかいつて先へすし見し悪黨ものを大げさに打はなせば龍尾川隣左衛門父子頼右衛門其外の勇士すかさず太刀かたなを抜持てのがすまじと切てかすれば大膳親子も今日をかきりと覺悟して而もふらず戦ひける一味の悪黨共の血氣にまかせて跡先の思案なく與力せし當分のたのもしづく重恩を得し者どもならねば朝熊龍尾川が劍術に達したる跡をみて雲助同前の雲川に興してあたら命を捨ん事無分別の至りと皆々尻をさかさまにして四方八方へ逃散たり覺悟を極らし大膳親子も一味の輩にげるを見て心ふくれてさじやうもうせ臆病風にさそはれてにげ出んとするを朝熊龍尾川兩方々親子の者を太刀打落しす々につけ入引くんでそくさに組とめなわをかけ友方公の御前へ引出せば世界の臣下の見せしめに門外へ引出し親や子共に首うてと仰を請て兩人頼て門外へ引出し首を切國境にぶくもんにかける、扱吉日になれば友成公の婚禮とてにぎしく諸家中の祝義物隣國よりのたる肴巻絹太刀折紙山のごとくにつまかさね出入の悦びがぼにこやかな女中がた下髪に打かけてうしくへの段人花をかざり吉例とて大船臺に御家の尉と姥との面をかけ御しうぎの高砂御夫婦の御春こそ先でたけれ

享保六丑ノ正月吉日

作者 其碩 自笑

名著集自第一卷至二十四卷目次

●第一卷	復讐月水奇縁	完	曲亭馬琴著
●第二卷	小春治兵衛花廻島盛	完	松亭金水著
	碗久松山柳巷話説	完	曲亭馬琴著
	大津土産吃又平名書助刀	完	式亭三馬著
	邂逅物語	完	天歩子著
	湘中八雄傳	完	北壺游著
●第三卷	吾妻餘五郎雙蝶記	完	山東京傳著
●第四卷	淺間ヶ嶽面影草紙	完	柳亭種彦著
	淺間ヶ嶽后編逢州執着譚	完	柳亭種彦著
	怪談雨夜の鐘	完	十返舎一九著
	夕霧替父章	完	栗杖亭鬼卵著
●第五卷	鮑廊通覽	完	洞羅山人著
	貞操美談園の花	完	爲永春水著
●第六卷	恩愛二葉草	完	鼻山人著
●第七卷	小夜の中山石言遣響	完	曲亭馬琴著
●第八卷	飛彈匠物語	完	六樹園著
	那那諸國物語 近江の巻	完	柳亭種彦著
	五色の糸屑 出羽の巻	完	峨眉山人著
●第九卷	三十三間堂 柳の糸	完	小枝繁著
	棟材奇傳	完	月亭有人著
●第十卷	花曆封じ文	完	曲亭馬琴著
	新果解脫物語	完	ちぬ平魚著
	於三墓平宗像曆	完	柳亭種彦著
●第十一卷	那那諸國物語大和巻	完	井原西鶴著
	胸算用(大晦日ハ一日千金)	完	柳亭種彦著
●第十二卷	昔語稻妻表紙	完	山東京傳著
	姫萬兩長者廻鉢木	完	曲亭馬琴著
●第十三卷	糸櫻春蝶奇縁	完	曲亭馬琴著

●第十三卷	那那諸國物語播磨卷	完	柳亭種彦著
●第十四卷	記録會我女黒舟	完	江島屋其碩著
●第十五卷	塞廼復讐戀の宇喜身玉等子	完	松亭金水著
●第十六卷	那那諸國物語伊勢の卷	完	笠亭仙果著
●第十七卷	那那諸國物語遠江の卷	完	笠亭仙果著
●第十八卷	怪談 登志男	完	惣雪舎素及子著
●第十九卷	佐野常世物語	完	曲亭馬琴著
●第二十卷	小説浮世牡丹全傳	完	山東京傳著
●第二十一卷	痴漢三人傳	完	咸和亭典武著
●第二十二卷	俊徳麻呂謠曲演義	完	振筆亭著
●第二十三卷	繪本連理の片袖	完	十返舎一九著
●第二十四卷	綴手摺昔木偶	完	柳亭種彦著
●第二十五卷	異國奇談和莊兵衛	完	遊谷子著
●第二十六卷	常夏双紙	完	曲亭馬琴著
●第二十七卷	櫻姫曙双紙	完	山東京傳著
●第二十八卷	忠臣水滸傳	完	山東京傳著
●第二十九卷	大晦日曙草紙	完	山東京傳著
●第三十卷	化貌丑滿の鐘	完	曲亭馬琴著
●第三十一卷	巳惚鏡	完	式亭三馬著
●第三十二卷	三七全傳楠柯夢	完	曲亭馬琴著
●第三十三卷	孝子嫩物語	完	高井蘭山著
●第三十四卷	春色淀の曙	完	松亭金水著
●第三十五卷	菊の井草紙	完	爲永春水著
●第三十六卷	會馨松の雪	完	峨洋堂著

但シ登録定價金五錢全部廿四冊代價金壹圓但シ登録ニ付郵税金貳錢

發行所 礫川出版會社

溫古小説發行目次

高砂大島臺	其碩著	正價金五錢	珍術器粟散國	其鳳著	正價金五錢
世間手代象質	其碩著	正價金五錢	元祿太平記	梅園堂著	正價金五錢
歲徳五葉松	其碩著	正價金五錢	咲分五人總	其碩著	正價金五錢
女非人綴錦	其笑著	正價金五錢	熊谷女編笠	錦文濟著	正價金五錢
武道近江八景	其碩著	正價金五錢	風流菊水卷	其樂齊著	正價金五錢
出世握虎昔物語	其碩著	正價金五錢	俄仙人戲言日記	閑鶴齊著	正價金五錢
那智御山手管浦	其碩著	正價金五錢	彩色歌相撲	其笑著	正價金五錢

明治二十五年二月九日印刷出版

(大島登)

編輯者

故其碩、自笑、

發行兼

足立庚吉

印刷者

小林立
東京市小石川區指ヶ谷町十七番地

發行所 小石川區掃除町三十三番地 磯川出版會社

關西販賣所 大坂市心齋橋北詰 競爭屋本店

大販賣所

日本橋區本石町二丁目 上山屋本店 京橋區尾張町 東海道雜誌店

神田區裏神保町 上山屋支店 日本橋區小網町 信交堂雜誌店

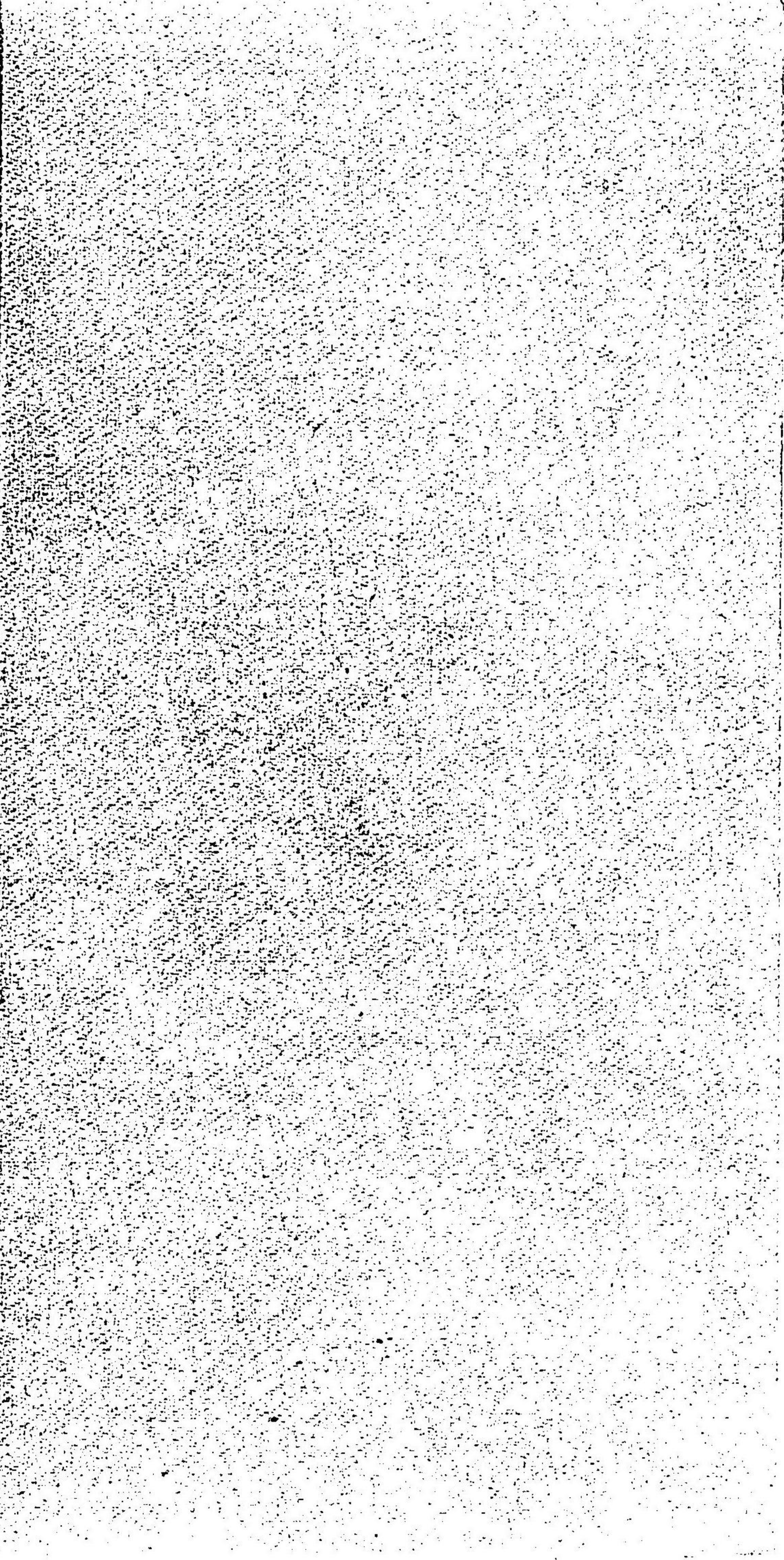
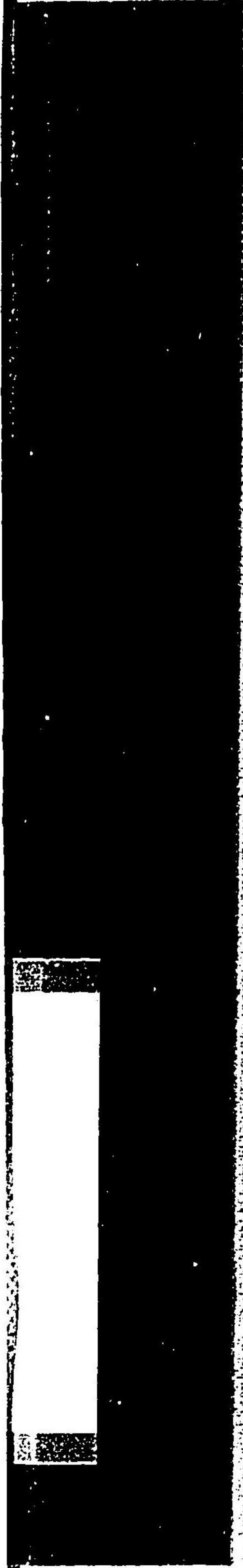
淺草區三好町 大川屋書店 京橋區彌左衛門町 櫻々堂雜誌店

日本橋區通四丁目 金櫻堂書店 日本橋區錦町 指金堂雜誌店

神田區錦町一丁目 武藏屋書店 神田區錦町三丁目三番地 井上藤吉

本郷區元宮土町 解明堂

右之外日本全國各書林雜誌店ニ於テ取次販賣仕候



913.52

E98t

089481-000-1

913.52-E98t

高砂大島台

江島 其碩

八文字屋 自笑/著

M25

DBM-1240

